Title	戸川秋骨年譜稿
Sub Title	
Author	松村, 公子(Matsumura, Kimiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2005
Jtitle	三田國文 No.42 (2005. 12) ,p.32- 71
JaLC DOI	10.14991/002.20051200-0032
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20051200-0032

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戸川秋骨年譜稿

松村 公子

凡例

- 一、各年号の下に掲げた年齢は、当該年十二月の秋骨の誕生日の満年齢による。
- 一、漢字は、一部の人名を除き、引用文も含めて新字体を用いた。
- 一、戸川秋骨を始め、一般に雅号によって知られる文学者の呼称は、その年齢にかかわらず雅号で統一した。
- 一、外国人名、外国文献名の片仮名表記は一般的な呼称に従ったが、秋骨自身による表記を用いた場合がある。
- 一、煩雑を避けるため、特に必要と認める場合を除いて、個々の事項について典拠を示すことはしなかった。但し、末尾に主要参考文献一覧を付した。

明治三年（一八七〇）

十二月十八日（旧暦）、熊本県玉名郡岩崎村九百九十七番地（現、熊本県玉名市岩崎九九七番地）に、父、戸川等照、母、ジュンの長男として生まれる。明治三年生まれにちなんで明三と命名される。戸川家は肥後細川家の分家にあたる高瀬藩の士族で、

扶持は百五十石。父、等照は弘化二年七月二十四日、同藩の家老、原尹胤の二男として生まれ、明治二年四月十八日に戸川家の養子となる。母、ジュンは嘉永二年十月二十七日生まれ。戸川多喜藏の長女。戸川家、原家はいずれも定府で、代々江戸に定住していたが、明治維新の際、国元に引き上げることとなった。後々、教育を受ける過程で、縁者の中でも特に、原家の出身である二人の叔母に負うところが多い。一人は横井小楠の甥、左平太と結婚した横井玉子で、熊本洋学校の出身。後に女子学院の教授となる。玉子を通じて徳富蘇峰・蘆花とも遠い縁戚にあたる。今一人は俳人大野洒竹の母、武である。

明治七年（一八七四）

四歳

この頃、学校に入学。ただし学校というよりは寺子屋に近いものだったらしい。時代、場所とも不明確ではあるが、プロテスタントの幼児洗礼を受けた、とも伝わっている。

九月三日、弟、健毘古（戸籍は、健毘吉）が生まれる。

明治十年（一八七七）

七歳

西南戦争の直前、親族をあげて上京。芝の西久保巴町に住む。

祖父はひとあし先に上京し、いわゆる士族の商法として煙草屋を開業していた。やがてこの煙草屋をたたみ、飯倉四丁目で父が米屋を営むようになり、秋骨は新シ橋内にあった師範学校付属の小学校に通った。しかし商売は失敗し、父は放浪遊蕩の生活に入ってしまった、住まいも八幡町や神谷町に移り、学校も巴町の柄絵小学校に変わる。

明治十一年（一八七八）

八歳

七月十八日、妹、乃ふが生まれる。

明治十三〜十四年（一八八〇〜一八八一）

十〜十一歳

数寄屋橋近くの数寄屋町に住む。この頃祖父は既に他界しており、一時、母も家を出ていたこともあって、麻布我善坊に住んでいた曾祖母、祖母のもとに引き取られるなど、環境はおだやかではなかった。祖母の家には、軍人で且つキリスト教信者の叔父（喜多流の能役者の家へ維新直前に養子にやられ、維新で復籍）がいて、この叔父から秋骨は漢訳の聖書を学んだ。能を初めて見たのもこの叔父による。またこの頃、英学の先生のもとに通う。

明治十六年（一八八三）

十三歳

柄絵小学校を退学し、陸軍の将校であった叔父の転任に伴って大阪に行き、二年近くを同地で過ごした。大阪中学校（第三高等学校の前身）に入学。住まいは大阪城の近くにあり、城の周

囲や淀川で遊ぶ。

明治十七年（一八八四）

十四歳

大阪から東京に戻り、しばらく叔父の家に住んだのち、京橋区築地一丁目三番地（現、中央区築地一丁目）の祖母の家（父の出自である原家）に引き取られる。家は新富座の近くにあり、よく芝居を見させられた。

明治十八年（一八八五）

十五歳

叔父の命に従い、麴町の独逸学協会学校に入学。

原家（前年の項参照）は広い二階屋で、高等下宿を経営。軍人、官吏、文人、新聞記者、さらには朝鮮の志士、金玉均等さまざまな分野にわたる名士が下宿していたが、その中でも、『時事新報』記者の高橋義雄（箒庵）は、社からデイズレーリの『春鶯囀』、ヴェルヌの『月世界旅行』などの翻訳小説や、坪内逍遙の『当世書生気質』などを持ってきては、秋骨に貸し与え、これが文学的教養の端緒となった。また、高橋からは英語も教わった。翻訳小説としては、他に、丹羽純一郎訳のリットン『花柳春話』、渡辺治訳の『鏡花水月』（原作はシェイクスピア『間違った喜劇』）、大平三次訳のヴェルヌの『海底旅行』、森田思軒訳のユーゴーの『探偵ユーベル』なども図書館などで読む。また、やはり間借り人であった後のロシア臨時代理公使、大前退蔵から『唐宋八大家文』を毎朝講読してもらったこともあり、後年、大前が帰朝後、木挽町に住んでいた時に、招かれてその客分の書生をしていたことがある（その頃そこを訪れた平田禿

木が、川に面した秋骨の部屋で、テーヌの『英国文学史』などについて語ったことを記憶している。馬場孤蝶も明治二十八年六月に、池ノ端の辺を歩きつゝ、大前家の様子を回想しているので、秋骨寄寓時代は明治二十五年前後の事か。高橋や、同じく『時事新報』の石河幹明の影響もあって、単独で週刊の『東洋新報』と称する新聞や、『目覚めのお茶菓子』という雑誌を作り、また学内で『団々珍聞』をまねた同人回覧雑誌などを作った。

明治十八年から十九年にかけて、叔母、横井玉子の知己にあたる高津柏樹が京橋山城町付近で開いていた高津学舎に通い、漢学と英語を学んだ。英語はのちに受持の教師の代理を勤めるようになり、ナショナルの第三読本を教えた。

明治十九年〜明治二十年（一八八六〜一八八七）十六〜十七歳
軍人になることを期待されて、攻玉舎に入学するが、海軍に入る気はなく、兵学校の試験も自分の意志で不合格になった。一時は学問を止めなければならなかったが、叔母（大野武）の助力で、この頃高等中学校を受験できるようになり、入学の準備のため、神田猿樂町の日本英学館に入学。間もなく神田駿河台の成立学舎に転ずる。英語の訳読のテキストはエドモンド・パークの「プレゼント・デイスコンテント」(Edmund Burke *Thoughts on the Cause of the Present Discontent*)。同級生に美濃部達吉、土肥春曙らがあった。

明治二十年（一八八七）

十七歳

二月三日、妹、愛が生まれる。

明治二十一年（一八八八）

十八歳

従兄弟の大野酒竹と共に第一高等中学を受験し、共に不合格後に酒竹は入学する。

九月、明治学院普通部本科二年に編入学。同級に島崎藤村（ただし親しくなるのは翌年になってからである）。遅れて中島久万吉が編入。一年下に岩野泡鳴、二年下に和田英作、三宅克己。

明治学院を選んだのは、外国語に上達し得る学校である、というのと、叔母の横井玉子が、幹事を勤めていた新栄女学校と同宗派の明治学院の幹事、杉森此馬の夫人と知己であったことによる。明治学院と新栄女学校は共に一致教会に属していた。

学院の教師は大半が外国人であったが、特に哲学、ドイツ語のランデイス、物理、化学のワイコフに感化される。グリーンズの英国史、フィッシャーの万国史、シヨアの文学史などをテキストに使う。和文以外、授業はほとんど英語で行なわれる。

明治二十二年（一八八九）

十九歳

一月、馬場孤蝶が明治学院に入学し、同級になる。この頃、校内の文学会での秋骨の演説を契機に、藤村との交際が始まる。親交が深まるのは、藤村が一時期明治学院を休み、夏休み後に学院に復帰してから。藤村はその頃、芭蕉、ワーズワースに傾倒しており、秋骨はその感化を受ける。外国の文学書としてはじめてカーライル『英雄崇拜論』（ルートレッジ社刊行）を購入。また、ダンテ『神曲』の英訳本を手に入れる。二葉亭四迷の『あ

ひびき」『浮雲』などを読むものこの頃。

十月十七日、孤蝶に「国民之友」六五号を貸す。内に露伴の「風流仏」の批評あり。

同十九日、登校中、孤蝶と芝公園で行き合う。

明治二十三年（一八九〇）

二十歳

二月十四日、午後三時頃、孤蝶と一緒に学院を下校。新橋から鉄道馬車に乗り、万世橋で下り、元富士町まで同道する。

三月五日、授業が終わる頃、三田で火災発生。札の辻に住む級友比佐道太郎の家に駆けつける。

同十四日、三時過ぎ、孤蝶等と学院を下校。孤蝶の甥が通っている三田の慶應義塾幼稚舎に寄り、その後新橋で孤蝶と別れる。

同二十日、大西祝の講演「文学に於ける悲哀」に、孤蝶と共に感激する。これ以後シェリーに関心を持つ。

五月二十一日、下校時、赤田開太、比佐、孤蝶と三田まで同道。六月二十五日、一級上の卒業式。この日、学内恒例の三年競技演説に出場する孤蝶に袴を貸す。式後、級友の高畑氏方に同級生が集まり、批把や水の御馳走になる。

七月五日〜十五日、明治学院で開かれた第二回キリスト教青年会主催の夏期学校に藤村等とともに参加。大西祝、押川方義等の講演を受講。普段は築地から通っていたが、この間は寄宿舎に泊まる。この頃サイモンスのシェリーの伝記を耽読。サイモンスの『イタリア文芸復興史』なども読む。また、この夏、サツカレーの『ヴァニティ・フェーヤ』（ロヴェル叢書）を購入。

八月三日、三時過ぎ〜四時、孤蝶を訪問。

八月、原家の間借り人であった岡野知十に連れられて鎌倉に行き、長谷の稲勢屋に一泊する。江ノ島などを見物し、花鳥風月に関心を示すことになった。

九月、新学期に、鎌倉行きに触発された「海」と題する英語演説を行う。

九月十五日、下校時、孤蝶と飯倉に行き、本屋に寄る。

同十六日、登校途中、芝公園弥生館の近くで孤蝶に出会う。

同十七日、十一時に学院を出て、孤蝶と京橋区日吉町まで同道。

同十八日、午後一時頃、孤蝶と一緒に下校。この日の授業は歴史のみ。

同十九日、十時半頃、孤蝶と一緒に下校。

同二十二日、孤蝶と一緒に下校。途中、札の辻の級友比佐道太郎の家に寄る。

同二十五日、孤蝶他、他の級友と共に下校。

十月七日、孤蝶と共に下校。

同九日、孤蝶と共に下校。

同十三日、この日の校内の文学会総会で、十一月に予定されている同盟文学会の弁士に選ばれる。

同十四日、一時過ぎ、孤蝶と共に下校。同盟文学会の弁士を辞す。

同盟文学会とは、東京英和学校、明治学院、東洋英和学校の各校から英語と日本語の弁士が一人ずつ出て演説を競うもの。各校持ち回りで定期的に行われた。女生生も参加し、音楽の演奏もある。

同十六日、孤蝶、赤田、比佐と共に下校。三田で別れる。

十一月一日、朝八時頃、孤蝶が来訪。お菓子などでもてなす。

同六日、午後二時頃、風邪と頭痛の孤蝶を見舞う。同盟文学会が種々議論の末、延期に決まったことを語る。

同九日、午後孤蝶を見舞う。

同十一日、午後孤蝶を見舞う。

明治二十三年の孤蝶の日記の中から秋骨の名が出ているところだけを拾うと、以上のようになり、藤村との関わりがほとんどないようにも見えるが、実際には孤蝶と藤村とは二人とも寄宿舎住まいで、それぞれの部屋をよく行き来しており、「珈琲入り角砂糖」が藤村から孤蝶に出されたり、ということもある。通常、週末に孤蝶は本郷の自宅に帰る。

在学中、中島久万吉を中心に回覧雑誌『葦草』（現在、所在不明）発刊。和田英作が表紙を担当し、藤村、孤蝶らとともに、秋骨も毎号、翻訳を載せる。ワシントン・アーヴィングの『スケッチ・ブック』の翻訳文は、学院の英語の先生を感心させた。また藤村らと『甲乙雑誌』を出して執筆。放課後には、藤村、孤蝶らとワースワース、バイロン、シェリー、シェイクスピアなどの外国文学について、また日本文学では二葉亭四迷の他、鷗外の「舞姫」、露伴の「風流仏」などについても盛んに議論する。

明治二十四年（一八九二）

二十一歳

一月一日、築地に孤蝶、赤田開太ら、来訪。種々雑談。

三月二七日、学院で聖書の試験。授業は休みなので、孤蝶、藤村と学院近郊を散歩。

六月、明治学院普通部本科卒業。

卒業後、内田周平のドイツ詩の翻訳を読んだのがきっかけで、

漢学者でもある内田周平について、大野洒竹とともに荘子の講義を受ける。

七月、テーヌの『英国文学史』（ロヴェル叢書）読了。同じ頃、シェリー訳でプラトンの『饗宴篇』、ロセッティの詩を読む。

この夏、大磯で初めて徳富蘇峰に会い、蘇峰夫妻、叔母横井玉子、洒竹らと大磯の高麗山に登る。蘇峰とはその後しばしば接し、エマーソンの『二十論文集』（*Twenty Essays*）を貸してくれたりもした。

明治学院卒業後は、自活のため、日本福音教会が開校した、築地四十九番の福音神学校で説教の翻訳や教師の通訳をするなど、西洋人の仕事の手伝いをする。

十一月二日、孤蝶、赤田開太と、三人で「ハムレット」の論講。三々四箇所解釈できず。

この頃、本郷妻恋町にも居住。どのような関係の家であるのかは不明。

同三日、藤村、孤蝶、赤田開太と四人で墨田川に沿って戸田河原の辺りまで、弁当を持って遠足。

同四日、午後、秋骨の寓で、赤田開太、孤蝶の三人で「ハムレット」論読。難解な箇所、多し。夜九時頃、孤蝶を誘い、本郷四丁目の店で珈琲を飲む。大学生で混んで来たので出る。途中種々談話。

同五日、午後二時から、孤蝶と「ハムレット」会読。難しい。同七日、孤蝶を訪ねる。「日本歌学全書」の代金、二十銭を渡す。少し話して、その後二人で赤田開太を訪ねる。

同九日、二時過ぎ、赤田開太の家で、孤蝶と三人で「ハムレッ

ト」輪読。難解。

同十一日、午後二時から、赤田開太の家で孤蝶と三人で「ハムレット」輪読。五時前に終わって孤蝶と共に孤蝶の家に行き、夕食。孤蝶が昼間親戚から貰った「くまびき」という土佐の名物が出される。帰りは一緒に勸工場などに寄って別れる。

同十四日、午前中孤蝶の家で、赤田開太と共に「ハムレット」輪読。十二時過ぎに帰る。午後一時過ぎ、妻恋町に訪ねてきた孤蝶と共に、浜町の藤村を訪ねる。秋骨は職業に関する不平を漏らす。

同十六日、三時頃から孤蝶の家で、赤田開太と、いつもの輪読。

同十七日、前日に同じ。

同十八日、前日にほぼ同じ。

同十九日、「ハムレット」の輪読。藤村も来る。

同二十一日、二度に亘って孤蝶来訪。夕方一緒に浜町に藤村を訪ねる。蕎麦を饗せられ、文学を論じ、八時過ぎ辞去。湯島六丁目で孤蝶と別れる。

同二十三日、昼過ぎ、雨の中を孤蝶の家に行く。その後赤田開太、藤村もやって来て、来年早々から高知の共立学校に就職の決まった孤蝶の送別会の相談などをする。

同二十六日、五時過ぎに孤蝶を訪ねる。送別会は二十八日に決まったことを伝える。「柵草紙」「山家集」を共に読み、七時過ぎに帰る。

同二十八日、築地、軽子橋際の三舛湯の二階の四畳半の座敷に、秋骨も含め、明治学院の級友五人が集まって孤蝶の送別会。藤村は木曾の実家に急用が起こり、欠席。

同三十日、孤蝶の家の近くで出火。見舞いに駆けつける。

十二月二日、四時頃孤蝶を訪ねる。もう一人の客と火鉢を挟んで話し、七時過ぎに帰る。

同四日、夕方孤蝶来訪、種々談話。

同五日、孤蝶を訪ねる。明治学院の級友、小倉鋭喜もやって来て、五目ご飯を饗される。

同七日、孤蝶を訪れる。赤田開太も来る。

同八日、高知に発つ孤蝶を、赤田等と共に新橋に見送る。

明治二十五年（一八九二）

二十二歳

四月～五月、藤村の紹介で北村透谷と出会う。以後、藤村、透谷、秋骨の三人は互いに親しく往来することになる。透谷は秋骨をラスキンと呼び、一方、秋骨は透谷を深く敬愛し、その作品に鼓舞された。なお、秋骨には小田原に親戚の家があり（祖父は小田原からの養子である、と後に秋骨は語っている）、そこは偶然透谷の実家に近く、透谷の弟と、それとは知らずに互いに遊び相手になっていた。五月八日に、透谷と藤村が築地に同行する約束をしているが、目的は秋骨を訪問することではなかったかと思われる（但し、秋骨側の記録はない）。またこの頃、やはり藤村の紹介によつて、巖本善治の知遇を得る。

七月十六日～二十七日、箱根で催されたキリスト教第四回夏期学校に藤村、上田敏らとともに参加。秋骨と懇意の元箱根の青木旅館に宿泊。

八月、湯谷紫苑、藤村らと鎌倉扇谷の正宗屋敷跡の借家でひと夏を過ごす。この間、雪ノ下に滞在中の星野天知を、藤村と共に

を訪れ、藤村から紹介される。この時、秋骨はほとんど話はせずに控えてあつたらしい。

八月二十九日、午後三時過ぎ、夏休みで高知から上京中の孤蝶を訪ねる。久しぶりに種々放談。「女学生」の夏月号外を孤蝶に貸して、午後八時頃に辞去する。

九月、この頃生活費困窮の状態にあり、藤村が、自分が受け持ち、月々七円の収入を得ていた「女学雑誌」の翻訳欄に秋骨を推薦。この欄で使用したペン・ネームは城東生。またこの頃大文学選科に入学すべく、ドイツ語を勉強する。平田秃木と知り合うのも、この頃と思われる。

十二月、この頃「女学雑誌」から分かれて雑誌「文学界」を発行する計画が進んでおり、藤村から「文学界」への参加をすすめられる。しかしまだ本格的な執筆活動には入っていない。

明治二十六年（一八九三）

二十三歳

一月三十一日、「文学界」創刊。第三号から執筆。初期には、「樓月」（築地に住んでいたことにちなむ）「鷗水」「早川漁郎」などと号した。

三月、六月、「哲学雑誌」掲載の、漱石「英国詩人の天地山川に対する観念」に啓発され、評論上の思考を定めることになる。七月下旬、同年二月一日から関西漂泊の旅に出ている藤村が旅を切り上げ帰東することになり、東海道吉原に、秋骨、透谷、秃木が出迎える。透谷が最初に、次いで秃木が横浜の商館から貰ったフランス葡萄酒を一本携え、少し遅れて秋骨は透谷夫人からの届け物などを持ってやって来る。その地区の裁判所の判

事であつた透谷の叔父が、裁判所前の宿を手配し、土地の料亭で一同をもてなしてくれる。「文学界」同人が相寄つての酒宴はこの時が最初。

ここに二、三日滞在した後、四人は箱根に向けて吉原を発ち、沼津、三島を経て箱根に着く。途中、秋骨が懇意にしている、明治学院の西洋人が散歩しているのに会う。その後、元箱根の青木旅館に到着。夕食時、透谷がシェイクスピアやゲーテイ座で見たハムレット劇について語り、興に入ると、頭にハンケチを載せ、オフエリヤ狂乱の舞をひとさし舞う。翌日、東京へ帰る透谷を秋骨、藤村、秃木の三人で底倉まで送り、萬屋へ寄つて一浴、ビール。その後、宿に引き返す。途中、芦の湯からは松明をともして歩く。翌日秃木帰京。藤村は鎌倉まで同行して、再び箱根へ引き返す。「秋骨」という雅号が藤村によつて、杜甫の古詩「畫鵲行」中の「高堂見生鵲、颯爽動秋骨」という句にもとづいて名づけられたのはこの間のことと推測される。

透谷が帰京後、東北伝道旅行に出発していること、秃木の回想から、この四人の会合は七月下旬に始まり、そして終わっていると思われる。

八月九日頃、藤村、秋骨連名で、東京の孤蝶に宛てて元箱根の青木旅館から葉書を出す。近々箱根にお出での際に、巢林子世話物でも持つてきてもらえれば……といった内容。

八月九日の項、「明治学院史資料集」昭和61年11月発行に所載、伊東一夫「馬場孤蝶における文学的青春」による。

同十六日、前日東京から来て箱根、塔ノ沢の鈴木旅館に泊まっていた孤蝶が、俳諧寂菜、巢林集を携えて、午後四時頃青木旅

館に到着。孤蝶はこれ以前に高知の学校をやめて帰京していた。久しぶりの再会で、それぞれに自分の身辺を語る。

同十七日、朝食後、秋骨一人箱根駅に行き、菓子を買って帰り、これを食べながら、三人でさまざまに談笑する。ゲートルの宗教心に関する事なども論ずる。この日秋骨に「憂き人の旅の心や芦のうみ」の吟がある。孤蝶の日記には秋骨の呼び名について、十五日まで「棲月」とあり、この日には「秋骨」の名が見える。孤蝶は箱根にやって来て新しい号を知ったらしい。

同二十三日、三人共に下山。藤村は一人東京に向かい、孤蝶と秋骨は塔ノ沢の鈴木旅館に泊まる。ここで働いていた千代を見初める。

同二十四日、午前九時頃、孤蝶は帰京のため出立。秋骨は元箱根に戻る。

同二十八日、元箱根を引き上げて秋骨帰京。孤蝶が出迎える。この秋から(遅くとも十月十三日以前、麴町区下六番町にあった明治女学校の教師となる。また、孤蝶に、築地の神学校の校長のフィッシャーの手伝いや、教会の通訳の仕事を紹介している。同じくこの頃、築地の原家で、孤蝶と禿木が初対面。

十月五日頃、宮城県一ノ関町から帰った藤村が築地の秋骨の許に一時逗留か。またこの頃トマス・グレイの詩に関心をもつ。同十九日、朝、孤蝶が築地の家に来訪。

同二十日、夜、築地の家に孤蝶が来訪。一緒に丸善に行く。誘われて宮松に小清一座の女義太夫を聴きに行く。この夜の演目は「御所桜堀川夜討弁慶上使之段」。

『明治文学研究』昭和九年六月号所載、星野天知「『文学界』雑誌顧

末」の末尾の文学界会計抜抄によると、この日、社中親睦会が行われたように書かれているが、孤蝶の日記からはその開催は窺えない。

十一月一日以降、この頃、(秋骨が池ノ端に下宿後か)藤村が秋骨を訪ねる。先客に透谷。その後、三人で日暮里、妙隆寺方に下宿していた禿木を訪ねる。近所の肴屋の座敷で四人で箱根芦ノ湖畔以来の酒席。

十一月九日、孤蝶を訪ねる。ハイランド(千代について、このように表現している)の話。

十二月三十一日、国府津から孤蝶と一緒に塔ノ沢に行き、泊まる。

この年、十一月以降、おそらくこの年内に下谷区池ノ端七軒町三十番地小島方に下宿。秋骨がこの下宿に住むようになってから、『文学界』同人どうしの往来が、非常に盛んになる。明治二十七年、二十八年のその様子を、やゝ煩雑な感もあるが、秋骨を主体にして、主に孤蝶の日記をもとに以下に記していく。

明治二十七年(一八九四)

二十四歳

一月一日、早朝、一人で塔ノ沢を引き上げる。

同八日、大磯での正月を終えた孤蝶が東京に帰り、すぐ下谷に秋骨を訪ねるが、不在。夜に入って秋骨が孤蝶を訪ね、「ハイランドの面影」を語る。孤蝶の家は本郷竜岡町十五番地。その後二人とも下谷の秋骨の下宿に行き、泊まる。

同九日、孤蝶と共に築地に行き、福音教会の関係者に会う。その後、二人で藤村を訪ね雑談する。秋骨は孤蝶より先に辞去。

同十日、孤蝶を訪ね、種々雑談。一旦引き上げ、夜に再度訪ね

る。この時は禿木も来る。十時頃辞す。

同十三日、禿木来訪。正午頃孤蝶、次いで藤村来訪。禿木が帰った後、明治学院時代の級友四名が訪れる。久しぶりに語り合い、広小路で洋食を取る。その後孤蝶だけを伴い、帰宅。遅くまで、ハイランドの物語。

同十四日、午後孤蝶来訪。一緒に孤蝶の家に行き、雑談。明日は叔母にハイランドの事を語るつもりだと言って、孤蝶を呆れさせる。

同三十日、『文学界』十三号(明27・1)に「変調論」掲載。

二月四日、禿木が日暮里の下宿から、池ノ端の秋骨の下宿に移り、しばらくの間、机を並べる。この家には、藤村、星野夕影、上田敏、大野洒竹らが、通学の途次など、折りにふれては立ち寄り、誰かが行けば既に誰かがいる、というような、仲間の集合場所となっていた。時には雑誌の編集も行われた。

同二十八日、『文学界』十四号(明27・2)に「活動論」掲載。

三月十二日、龍泉寺近くの三輪の某子爵の家令(青田氏)の別邸に藤村の長兄一家が一時住んでおり(藤村も同居)、この日『文学界』一同が招かれる(この途次、孤蝶が禿木に連れられて初めて一葉を訪問している。なお、禿木が菊坂に一葉を初めて訪れたのは明治二十六年三月二十一日)。

四月十一日、『文学界』同人、池ノ端の秋骨、禿木の下宿で小宴。

孤蝶、禿木連名の、前日付一葉宛招待状による。なお、『文学界』明治二十七年四月三十日号の記事から、この小宴は実際に催されたものと思われる。なお、この招待状によれば、一同で記念撮影をすることになっている。

同二十四日、透谷の『エマルソン』が本になる。これが民友社から透谷のもとに届いた頃に藤村と秋骨が透谷の家を訪れる。五月十六日、透谷、芝公園の自宅で自殺。翌十七日、白金瑞聖寺において葬儀。

同、二十二日、藤村と共に京橋区弥左衛門町の透谷の実家を訪れ、生前に書かれた多数の反故を調査。その中から戯曲「五縁十夢」のうち「悪夢」の断片を『文学界』十七号(明27・5)に掲載。

六月四日、透谷三週忌。九段坂下玉川堂での追悼会に出席。当時の名の通った文壇人を間近く見た最初の機会となった。

八月一日、三時頃、孤蝶を訪問。夕方一緒に神田に出て、本屋に寄り、その後九段坂下で水を喫して別れる。

〔馬場孤蝶自筆日記〕明治二十七年八月三日(早稲田大学図書館蔵)

同三日、西方町十番地の田口卯吉邸に寄留している上田敏を禿木と共に訪ねる。十二時頃藤村と孤蝶もやって来て、種々談話。

秋骨は後年「二葉女史の追憶」で、初めて樋口一葉に会った時の様子を語っているが、その記憶と、季節、メンバー、日清戦争が始まった頃という時期、など、孤蝶の日記の内容とが一致している。西方町十番地と一葉が住んでいた丸山福山町四番地とは直線距離で二百五十メートル前後。但し、孤蝶の日記には、田口邸を辞した後、一葉の家に寄った、という記述は見えない（写真参照）。

同四日から七日頃までの間、藤村、禿木と共に、二度目の一葉訪問。一葉が「変調論」愛読と聞く。

秋骨が一葉を訪問した具体的な日付は、一葉日記、孤蝶日記、一葉宛書簡以外では、「文学界」同人相互の書簡などから類推するしかない。筑摩書房版『藤村全集 第十七巻』で、明治二十七年九月一日付けとされている星野天知宛の藤村書簡は、秋骨の二度目の一葉訪問の日を、ある程度の範囲で特定できる数少ない資料の一つであるので、九月一日という日付の妥当性に立ち返り、その発信日の推論を試みた。同書簡は、同年八月十四日付の禿木宛書簡と、内容・文言や天候も含めた新聞記事が酷似していること、同日に禿木と天知に宛てて書簡を出していること、『文学界』二十号（奥付では八月三十日発行、同二十二日の編集に藤村も参加している）所載の星野天知「清少納言のほこり」を、まだ読んでいないと思われる記述から考え、八月十四日に書かれ、さほど時間をおくことなく投函されたものと思われる。その頃の禿木の動静を併せ考えると、そこに記されている秋骨、禿木、藤村の三人で一葉を訪ねたのは八月七日頃以前、四日以降のことと考えられる。

同九日、朝、孤蝶を訪問。午後一緒に藤村を訪ねる。

同十八日、午後、孤蝶を訪問。五時過ぎには藤村も来る。

同二十二日、孤蝶の家で『文学界』二十号の編集。九時頃に上田敏、その後秋骨、藤村、夕影が相次いで参集。午後五時頃までかかる。藤村曰く「大におもしろき集合」（八月二十六日付、禿木宛書簡）。

同二十五日、藤村と共に天知の本町宅で『文学界』二十号の校正。藤村は、この頃の秋骨の様子について、「ものぐるはしき」と評している。

九月三日、孤蝶と一緒に鎌倉笹目ヶ谷に星野天知を訪ねる。主人の手料理に与る。午後五時頃辞去。鎌倉から汽車に乗り国府津で下車。塔ノ沢の鈴木旅館に行つて泊まる。

同五日、同じく鈴木旅館に滞在中の、孤蝶の親族、豊川良平に紹介され、昼食の馳走に与る。

同六日、小田原の鷗盟館に行き、泊まる。鷗盟館と鈴木旅館は同じ経営。

同七日、孤蝶より一日早く、一人で東京に戻る。

同十二日、夜十時過ぎ、孤蝶宅に行き、泊まる。

同十三日、午前中に帰宅。

同十四日、孤蝶が日本橋に天知、夕影を訪ね、秋骨の現状と今後について相談。秋骨は女学校の教師という職業は得意な方面ではなさそうである。この時、後任には藤村を、と天知は考えているが、秋骨は明治二十八年中頃まで、明治女学校に勤めていると思われる。

同十七日、孤蝶を訪ねる。ハイランドに贈り物をしようとして

いる。

同十九日、朝、築地の神学校の寄宿舎で孤蝶と語る。

同二十一日、午後、孤蝶を訪問。この日は禿木、藤村も集まる。

夜は吾妻橋に行き、小清一座の女義太夫を聞く。

同二十二日、朝八時頃、孤蝶と一緒に一葉を訪問。「闇夜」の続稿の催促。

同二十三日、午前中孤蝶を訪ねる。禿木、夕影も集まり、数時間談笑。

十月五日、孤蝶を訪ねる。

同六日、午後遅く、孤蝶宅にて、藤村と三人で雑談。

同七日、向島の有馬温泉にて、『文学界』同人の宴会が催される。

天知、夕影、禿木、藤村、秋骨、孤蝶、洒竹、上田敏の八名が集まる。宴の途中でやゝ大きな地震が起こる。秋骨はこの夜は孤蝶宅に泊まる。

星野天知「黙歩七十年」内の「『文学界』雑誌記録帳より」には以下のように記されている。「十月同人初回ノ親和会ヲ催ス。記念写真。連名は禿、藤、秋、柳、夕、吾卜孤蝶ノ七名。孤蝶とは初対面ナリ。何人カラ知ラズ。五同人ニ客ナリ。洒竹入社、之ヨリ俳味縦横」

現在、ここに名前が挙がっている七人だけが写っている写真が残っている。この写真の撮影時期は明治二十七年四月、或いは同年十月とする、二つの説がある。四月説の根拠は明治二十七年四月十日付一葉宛の、孤蝶、禿木連名の葉書と後年の藤村の回想によると思われ、十月説は天知のこの記録によると思われる。この天知の記録は、現在われわれが見る写真と同じ名前が挙がっている点では、十月説の方を裏付けているが、その一方でこの記録の中の「孤蝶とはこの

時初対面云々」は、この時以前に孤蝶と天知は何度も会っている中で、記録の信頼性がいま一つである、という弱点がある。また孤蝶の日記にはこの日も含め、同人の写真撮影に触れた記述は見あたらない。

同八日、十二時過ぎに孤蝶宅を出る。

同十日、孤蝶が秋骨を明治女学校に訪ねる。藤村も加わり三人で種々世間話。

同十一日、朝、孤蝶を訪問。

同二十日、午後、孤蝶を訪問。

『明治文学研究』昭和九年六月号所載、星野天知「『文学界』雑誌願末」には、この日に初めて同人の親睦会を催して記念撮影をした、と記されているが、孤蝶の日記には見えない。

同二十七日、夕方、孤蝶宅を訪れ、この日はそのまま泊まる。

同二十八日、孤蝶と共に本町の星野家を訪れる。藤村、禿木も来て、『文学界』売店設置の相談をする。

同三十一日、夕方、孤蝶を訪ね、七時過ぎに帰る。

十一月八日、夜、孤蝶を訪ね、雑談。

同九日、夕方、孤蝶が来訪。原稿紙を所望される。

同十一日、夜、孤蝶が来訪。箱根のことなどを中心に種々雑談。

同十二日、夕方、孤蝶が来訪。箱根のことなど、雑談。

同十六日、朝十時過ぎ、孤蝶を訪ねる。十二時近く、禿木も来る。

同十七日、夕方、孤蝶が来訪。十時過ぎまで快談。

同十八日、朝、教会に行く途中の孤蝶が来訪。

同二十一日、藤村来訪、夜、孤蝶来訪。十一時過ぎまで三人で

雑談。

同二十二日、禿木、藤村、孤蝶が来訪。孤蝶から原稿を受け取る。

同二十三日、夕影、藤村、孤蝶来訪。孤蝶は十時過ぎまで留まる。

同二十六日、夜、孤蝶を訪問。

同二十九日、午後、孤蝶来訪、一緒に丸善に行く。

十二月一日、午後七時頃、上田敏、秋骨が、相次いで孤蝶を訪ねる。文学を談じ、人生を論ず。

同三日、夕方、夕影、孤蝶が訪れる。十時前まで、談話。

同五日、夜、孤蝶を訪ねる。

同六日、孤蝶、藤村来訪。藤村は八時過ぎに帰り、残った二人は鮎を食す。

同九日、日清戦争の祝捷会。夜、孤蝶が来訪。亡くなった透谷の夫人ミナ、禿木、秋骨の弟、従妹が既に来ている。上田敏も来る。

同十二日、午前中、孤蝶を訪れる。「万朝報社従軍の口がいろいろありそうだ。」と孤蝶に伝える。一旦引き上げる。夜、孤蝶来訪。十一時前まで種々雑談。

同十四日、築地からの帰りの孤蝶に会う。一旦別れ、午後二時ごろ孤蝶の家に行き、一緒に一葉を訪ねる。四時頃一葉宅を辞し、上田敏のところに寄り、談話。それぞれ帰宅後、今度は孤蝶が秋骨の家に来る。この時は藤村が先客として既に来ている。

同十六日、午後二時、孤蝶と一緒に藤村を訪ねる。
十二月十九日、「大つごもり」の原稿を一葉から受取り、礼状を

認める。

二十六年二月と二十七年十二月に秋骨が『文学界』から受け取った原稿料は、天知の『文学界』会計帳によれば、七回分、三十五円、ということである。

二十七年から二十八年にかけて、この頃、敵本善治の家で、岩野泡鳴とよく会う。

明治二十四年以降の秋骨の寄留先として、池ノ端七軒町の小島家など数カ所が当時の書簡、記録類に散見できるが、明治二十七、八年の孤蝶の日記にはそれら寄留先だけではなく、「築地」で秋骨、孤蝶、藤村等が会う場面も少なくなく、この「築地」が正確にはどこを指しているのか、判然とはしない。築地には十四歳の頃から暮らした原家の祖母の家の他に、その近くに秋骨の父の家も存在していた形跡がある。

戸川家の本籍地は、明治四十一年に京橋区築地一丁目七番地から、大久保百人町に移されている。戸主は父の戸川等照である。この築地の番地は、明治二十八年の馬場孤蝶の日記の裏表紙の、知人十八人の住所の書き付けの中の、秋骨の住所として記されているものと一致している。同じくこの書き付け中の、藤村と一葉の住所により、この住所録は、明治二十七年五月以降、明治二十八年夏までに書かれたものであり、これを反古として、明治二十八年の日記を綴じる際に、表紙として利用したものと思われる。一方、熊本県玉名市に残っている出生地の戸籍は、二重戸籍であることが判明したため明治二十三年に削除の手続きがとられていることから、明治二十年前後にはすでに築地に、戸川家の本籍地であり、知人からの連絡先でもある、築地一丁目七番地の居住地が存在していたと考えられる。

明治二十六年十月の藤村よりの秋骨宛書簡の宛先は築地一丁目三番地になっている。これは祖母の家と考えられる。明治二十八年七月八日付、藤村の孤蝶宛の書簡には、藤村が「築地の寓に」秋骨を訪ねた、とあり、「寓」という表現がされている。これが正確にはどこを指しているのか、はつきりしない。明治三十二年秋に、藤村がやはり「築地の寓」を訪ねている。この時秋骨は山口に戻ったため留守で、原しげ、横井玉子の二人が応対している。ここは明治二十八年の「寓」と同じであろうと思われる。これとは別に、秋骨は明治学院院卒業後、築地の福音教会の神学校で仕事をしているので、その宿舎のような場所である可能性も、状況によっては考えられる。いずれにしても、明治学院卒業前後から山口に行くまでの七、八年の間に、その時々で、明治学院卒業前後から山口に行くまで、立ち寄り先は複数存在していたのかもしれないが、帰るべき場所であったと、考えられる。

明治二十八年（一八九五）

二十五歳

一月一日、朝九時過ぎ、池ノ端の秋骨を孤蝶が年始に訪れる。孤蝶は秋骨の許を辞して後、上田敏、一葉、川上眉山等に年始の挨拶に回っている。

同二日、築地で孤蝶と会う。箱根行き準備に忙しい。午後二時過ぎ、孤蝶を家に訪ねる。

同三日、孤蝶と一緒に箱根の塔ノ沢に向かう。新橋駅で徳富蘇峰に出会う。

同四日、三時過ぎに鈴木旅館を出発して、夕方、国府津の鷗盟館に着く。

同五日、午後二時過ぎ、一人帰途に着く。孤蝶は六日に帰京。

同十日、禿木来訪。夕方、孤蝶が来る。十時過ぎまで談話。

同十二日、二時頃、孤蝶を訪ねる。少時の後、秋骨の寓に戻り、八時位まで談話。

同十三日、夜、孤蝶来訪。

同十五日、孤蝶が来る。将来についての相変わらぬ愁嘆話。

同十六日、上田敏、孤蝶が来る。三人で大いに話す。

同十九日、夜、孤蝶来訪。明日、二人で一葉を訪ねることを約束す。

同二十日、孤蝶と二人で一葉を訪ねる。様々の談話、「源氏物語」の評論など。夕方辞し、帰途、藪蕎麦に寄る。

同二十一日、築地に来た孤蝶と銀座の川岸で行き合う。

同二十二日、孤蝶と藤村が訪れる。

同二十七日、孤蝶が、築地の教会からの帰りに寄る。「源氏物語湖月抄」を孤蝶に貸す。夜、再び孤蝶来訪。この時は禿木も居合わせ。三人で快談。

同二十八日、夕方、神保町の文学界社で藤村、孤蝶に会う。三人で富士本に行き、小清の女義大夫を聞く。

同三十日、午前中、孤蝶が来る。

二月三日、十二時過ぎ、孤蝶と共に藤村を訪ねる。その後別の知人を訪ね、江東の梅園に行く。

同五日、孤蝶来訪。遅くまで放談。

同七日、孤蝶が上田敏訪問の帰途、来訪。十時過ぎまでとどまる。

同十日、夜、禿木と一緒に孤蝶を訪問。十時過ぎまで。

同十一日、夜、孤蝶の家に行き、読売を貸す。

同十三日、孤蝶を訪問。

同十四日、藤村と一緒に孤蝶を訪問、談笑。夕方辞去。

同十七日、十一時頃、孤蝶を訪ねる。七時頃まで語り、その後一緒に本屋を回る。

同二十二日、藤村、孤蝶、大野酒竹が来て、三人で談ずる。

同二十四日、禿木、酒竹がいるところに孤蝶が訪ねて来る。孤蝶は禿木と秋骨を伴って帰宅する。雑煮、餅などを饗せられる。

同二十八日、夕方、孤蝶を訪ねる。一緒に立花亭に行き、小清の女義太夫を聞く。

三月九日、朝九時過ぎに孤蝶を訪ねる。一旦帰り、四時過ぎ再び、孤蝶の家に行く。

同十三日、孤蝶を訪ねる。一緒に本郷通りの藪蕎麦に行く。

同十六日、朝九時頃、孤蝶の家に行く。一旦戻り、夕方再び訪れ、うどんを食して、談話。

同十七日、四時頃、孤蝶が、病臥中の藤村を訪ねた後に、来訪。

同二十日、禿木と孤蝶が来る。談話中に藤村も来る。湯豆腐で夕食。上田敏も来る。

同二十四日、築地の教会で、禿木、孤蝶と顔を合わせる。

同二十六日、午後、孤蝶、藤村と一緒に来訪。十時までとどまる。

同二十七日、藤村、夕影、酒竹来訪。五時過ぎ、孤蝶来訪。談笑

同三十日、夕方孤蝶を訪ねる。談話中、藤村も来る。一緒に本郷中央教会の会堂での音楽会に行く。ケーベル氏のピアノ。

同三十一日、午後孤蝶来訪。一緒に孤蝶宅に行き、五時過ぎ二人で一葉を訪ねる。様々に論じ、八時頃辞去。

二月く三月頃、八月前後に出発の予定でアメリカ行きを考えているが、結局実現しなかった。

四月二日、孤蝶、上田敏、藤村の三人で秋骨を訪ねるが、不在。敏は帰るが、あとの二人は秋骨の帰りを待つ。秋骨帰宅後、三人で箱根行きの話など。

同四日、夜、孤蝶を訪ねる。箱根行きの際。

同五日、上田敏、孤蝶が訪ねてくるが、秋骨は不在。この日から築地の家に帰っている。

同九日、六日から鷗盟館に泊まっていた孤蝶の許に、秋骨から「明日行く」という内容の英文の手紙が届き、それに対して孤蝶が秋骨に「明日来るように」という電報を打つ。

同十日、一時半頃、秋骨到着。

同十一日、孤蝶と一緒に帰京。夕方、あらためて孤蝶を訪ねる。上田敏も居合わせる。

同十二日、夜、藤村と一緒に孤蝶を訪ねる。

同十三日、酒竹、孤蝶が来る。夕方孤蝶と共に上田敏を訪ねて行く。

同十四日、禿木を除く「文学界」同人七人（大野酒竹も参加）で小金井に花見に出かける。帰途、本郷に戻って藪蕎麦へ。酒竹が百面相で皆を抱腹絶倒させる。その後、酒竹、天知、夕影、藤村、孤蝶の五人は本郷の若竹亭で小清の女義太夫を聞く。

同十五日、夜、孤蝶が来る。

同十七日、孤蝶来訪。孤蝶は藤村を訪ねた帰り。

同二十日、朝、上田敏、孤蝶が来る。

同二十一日、上田敏、藤村、孤蝶が来る。

同二十六日、夜、孤蝶が来る。

同二十七日、夜、孤蝶を訪ねる。ハイランドの件。

同二十八日、朝、教会へ行く途上の孤蝶が立ち寄る。夜、七時過ぎ、孤蝶が来る。この日は秋骨の弟も同席。

五月一日、孤蝶を訪ねる。藤村も居合わせる。少時談話して辞す。その後、今度は孤蝶が訪ねて来た時に『文芸第四編』を渡す。

同三日、藤村、孤蝶が透谷追悼会の事を話しながら歩いている時、新坂下で秋骨に行き合う。

同四日、禿木がこの日からまたしばらく秋骨の下宿に同居。

同十二日、孤蝶が来る。夕方まで放談。

同十三日、夜、孤蝶が来る。

同十八日、不忍池の橋畔の鰻屋に禿木といたところ、歩いてゐる孤蝶を見かけ、呼ぶ。その後二人で孤蝶の家に行く。上田敏もその後、来る。

同十九日、朝、教会へ行く途上の孤蝶が立ち寄る。

同二十日、夜、訪ねて来た孤蝶と無縁坂で行き合い、そのまま孤蝶と共に一葉を訪ね、夜更けまで様々な話をする。

同二十一日、午後六時過ぎ、孤蝶来る。

同二十三日、孤蝶が来る。

同二十五日、三時過ぎ孤蝶が来て談話。そのうちに、藤村が来る。

同二十七日、朝、孤蝶が来て禿木と三人で大いに語る（孤蝶は

この後禿木と上野の三橋亭に向かうが、途中で『文学界』の方向性に関する事で、二人は大衝突をする。しかし、三〇四日後には、話し合いの場を持つている。夕方、藤村に次いで秋骨も孤蝶を訪ねる。三人で吹抜亭に行き、小清の女義太夫を聞く（この時は藤村、秋骨の二人は、孤蝶と禿木の衝突について知らされてない）。

この五月頃から、秋骨をはじめ、禿木、敏、孤蝶等、以前に増してしばしば一葉を訪問。試験勉強中にも出かけていく禿木に、秋骨が意見したりもしている。

六月二日、午後、孤蝶を訪ねる。旅行談など少々。夕暮れ時、一緒に禿木を訪ね、麦とろを食す。八時頃みんなで一葉を訪ねるが、留守。上田敏の家に回り、九時過ぎまで話す。

同十二日、三時過ぎ、孤蝶を訪問。禿木、藤村も集まる。

同十四日、孤蝶が文科大学に、英文選科を受験する秋骨の願書を提出に行く。

同十五日、孤蝶を訪ね、共に丸善に行く。

同十八日、孤蝶来訪。前日孤蝶が川上眉山から依頼された件（内容不明）について談ずる。

同十九日、築地で孤蝶に会う。叔母横井玉子から依頼された、西洋人を日光に案内するガイドの仕事に孤蝶が引き受ける（孤蝶は二十七日、日光に行くが、途中で帰って来てしまう）。

同二十一日、福音教会の仕事で築地に来た孤蝶と会って、昼食。二時頃まで。

同二十三日、築地で孤蝶と会う。

同二十四日、孤蝶と会う。

同二十五日、朝、築地で孤蝶と会う。

七月八日、築地に藤村来訪。

同十二日、午後孤蝶に会う。「我おもしろの記」を星野家に送ることを頼まれる。

同十四日、上田敏を訪ねる。藤村、孤蝶も居合わせる。その後孤蝶と二人で、孤蝶宅へ。風流の夢を語る。

同十五日、孤蝶来訪。

同二十三日、孤蝶を訪ね、大学選科の試験に合格したことを伝える。六時過ぎ、禿木、眉山と共に再び孤蝶を訪ねる。十時過ぎまで放談。

同二十九日、築地で孤蝶に会う。十一時、一緒に築地を出る。

同三十日、池ノ端に孤蝶来訪。小憩後、池畔で別れる。

八月六日、藤村に会う。眉山の家から帰る途中の孤蝶と道で行き合い、三人で再び眉山の家に行く。眉山宅を出てから回り道の後、七時頃本郷の藪蕎麦で食事。それから孤蝶の家に行き三人で放談。

同十二日、築地に孤蝶来訪。一緒にフィッシャーを訪ねる。この頃には孤蝶が九月から彦根の中学校に赴任することが決まっている。十一時過ぎ、三橋亭で食事。英語で話し合う。

同十三日、丸善近くの汁粉屋で禿木、孤蝶と共に、汁粉と雑煮を食す。その後池ノ端に帰る。

同十七日、午前十時過ぎ、孤蝶を訪ね、種々話す。

同二十三日、日本橋本町の星野家を訪ねる。孤蝶も来合わせる。同二十六日、夕方、孤蝶を訪ねる。地図を買いがてら、一緒に出る。

同三十一日、彦根に発つ孤蝶に書を寄せる。

九月、東京帝国大学文科大学英文学科選科に入学。帝大では黒川真頼、ラフカディオ・ハーン、外山正一、井上哲次郎、上田万年らに学んだが、とりわけ哲学のケーベルに私淑。またハーンからはしばしば本を借りた。ロングフェローの説をたよりに英訳『神曲』を読破して古今の文学者中ダンテを第一と考えるにいたり、『湖月抄』によって「源氏物語」を読破したのも帝大在学中のことと思われる。

九月二日、彦根中学校に英語教師として赴任する孤蝶を送つて、大磯から秋骨、藤村、夕影が同行。まず鷗盟館に行くが休業。そこで箱根の塔ノ沢まで行く。その日は温泉に入り、その後宴会と花札。

同三日、四人で国府津の鳶屋に寄つてから駅に行き、そこで西に向う孤蝶と別れる。

十月、この頃、イタリア語を学習。

同月末、この頃、土曜の夜毎に一葉を訪ねている。十一時以前に帰ることはなく、同家での振る舞いから、この時期一葉の母、妹からもやゝ疎んじられ気味で、「うたての哲学者よ」などと、一葉の日記中で言われることもあった。

十月〜十一月、『帝国文学』会員になる。

十一月三日、午後、禿木と共に一葉を訪ねるが会えず。夜、再び訪れる。この間、小石川上富坂町の眉山の家で暇をつぶしていたらしい。

十二月二十二日、上田敏が来訪。詩歌、宗教などについて語り合う。

同二十六日、彦根から帰京する孤蝶を迎えに、小田原の鷗盟館に出かける。本来は二十五日に迎える約束をしていたのだが、秋骨は一日間違えてしまい、前日、孤蝶は一人、憤然としていた。

同二十七日、一葉に宛て、小田原から手紙を出す。十一月三日のことにも触れている。この後数日、鷗盟館に泊まってから帰京。

明治二十九年（一八九六）

二十七歳

一月初頭、小石川区上富坂町四十三番地の眉山宅を禿木とともに訪問。尾崎紅葉も同宅に年始に来訪、あとから孤蝶も訪れる。この時秋骨は紅葉に揮毫を頼み、『マアロオ詩集』（マアメエド叢書版）の見返しに「狼の人喰ひし野も若菜かな」の句をもらった。この『マアロオ詩集』は禿木の手に渡ったが、明治三十一年、二年頃、神田明神裏の禿木の下宿が火事に遭い、その時焼失したらしい。秋骨はこの後も度々紅葉に会っている。この年、十二月から『読売新聞』の「月曜付録」欄に、門外生の名で文芸時評に執筆することとなる。しかし後に、連載中に紅葉自ら手紙で執筆を断ってくる。

同六日、鷲谷の料亭、伊香保で『文学界』主催の大懇親会（新年会）開催。同人の他、読売新聞の記者、関巖次郎、田山花袋等新進文壇人を多数招待。六、七十名出席。

同七日、冬休みを終えて彦根に帰る孤蝶を藤村、中川尚綱とともに、新橋駅に見送る。

二月二十日、この日以前、そう遠くない時期に本郷区台町二十

一、岡田方へ転居。同家は後に「環翠館」と名付けられた。同二十一日、一葉を訪れ長座。翌日お詫びの葉書を一葉に宛てて出している。

同二十三日頃、この頃、度々一葉を訪問、孤蝶に手紙で、さぞかしおうちの人も、特に夜など迷惑だろう、よろしくお詫びを言つて欲しい、といつており、一葉に対して非常に恐縮している。これを承けて孤蝶は一葉に対して、秋骨を手紙で取りなしている。この頃、「忙しくて勉強できない、学校を止めようか」と悩むが、孤蝶から「学校に行くだけでも行った方が良い」と言われ、思い止まる。また、一葉と眉山は何かと不平を聞いてくれていたらしい。

三月七日、帝国文学会役員改選により、土井晩翠らとともに役員に就任。

同二十日頃、彦根の孤蝶に英文の書簡を送る。藤村の近況にも触れる。

この頃、『明治学院史資料集』昭和62年11月発行に所載、木戸昭平秋骨の孤蝶にあてた英文書簡の「解題」、及び平林武雄「同訳文」による。

四月十九日、『うらわか草』の題字が秋骨のもとに届き、それについて翌日お礼の葉書を一葉宛てに出す。この題字は、かねて一葉を通じて小出繁に依頼していたもの。

同二十四日、天知より、原稿料、五円を受け取る。

五月二日、『文芸倶楽部』掲載の「たけくらべ」を評した『めさまし草』を持参して、禿木とともに一葉を訪ねる。この「たけくらべ」評を帝大の教室で読み上げた時の上田敏の興奮の様子を伝える。

同月から三十一年三月まで『少年文集』に「英詩評釈」を連載（十九回）。博文館の大橋乙羽の知遇を得ていたことによる。

同二十六日、『うらわか草』創刊（一号のみで廃刊）。

同二十七日、一葉を訪ね、『うらわか草』を届ける。いろいろと物語る。

同三十日頃、一葉、「秋骨が病がちである」との噂を聞いている。六月十日頃、天知に、「毎日のように一葉の許にいりびたっている」と、小言を言われる。

同二十一日頃、「甲州街道から富士川を下って彦根に行きたい」旨、藤村に述べている。但し、確たる計画ではない。

八月七日、『文学界』編集について禿木と秋骨とで相談する。一葉に、去年、『読売新聞』に連載した「空蟬」の再掲載を頼むことにしたものと思われる。

同十三日、一葉に病気の見舞状を書く。

同二十二日以前、そう遠くない頃、藤村、孤蝶ら『文学界』同人五く六人で、夜九時から不忍池に遊ぶ。

同二十四日頃、一葉の病状を見舞っている。「快方のようだ」と禿木に伝えている。

十月下旬、秋骨の下宿を突然斎藤緑雨が訪れて一葉危篤の由を報じ、一葉亡き後の樋口家の後事を相談する。この時が二人の初対面。以後、緑雨との交際がはじまる（緑雨が一葉を初めて訪問したのは同年五月十四日）。

十一月二十三日、一葉死去。前日、樋口家から秋骨の許に一葉の容体急変を報せる葉書を出しているが、臨終には間に合わなかった。二十三日夜、孤蝶に一葉死去の電報を打つ。緑雨と秋

骨が葬儀の指図をし、一葉死後、二人は樋口家のためにさまざまの助力をした。

明治三十年（一八九七）

二十八歳

この頃齋藤秀三郎の興した正則英語学校の講師をしていたと思われる。当時秋骨等は「新進文学士連」と言われていた。この頃『スコット叢書』でエドモンド・ゴス『北欧研究』、バイロンの日記、シェリーの『無神論の必要』などを読む。フランス、ロシア文学に接する。

一月、帝大のケーベルが、秋骨の願いに応じ、『文学界』の表紙に使うためのゲーテの句を認め、直接渡される。一月三十日発行の『文学界』四十九号以降の表紙のドイツ語はこの時のもの。一月二十七日、川上眉山に電報で呼ばれ、孤蝶と共に箱根、塔ノ沢の環翠楼に出かける。そこで、眉山と共に滞在していた江見水蔭に会う。この時初対面。そこで、一、二泊してから、眉山と共に水蔭の片瀬の家へ行き、宿泊。翌日、水蔭の家の下の川から小舟を出して江ノ島を一周する。

三月十三日、小石川植物園で帝国文学会春期大会開催。役員の変更があり、秋骨は任期満了に伴い退任。

四月、『新著月刊』に『読売新聞』の時文担当者、門外生とは戸川秋骨氏の同体異名なりと聞いて、暫く噂のまゝを掲ぐ云々との記事がある。

七月三十一日、このころ紅葉から「多情多恨」の批評を依頼される（十一月八日付『読売新聞』に門外生「多情多恨と其の世評」が掲載される）。

初夏、緑雨に伴われ、初めて千駄木の観潮楼（鷗外居宅）へ行く。鷗外と暫く話して、それから三人で上野をぶらつき、本郷の青木堂へ行ってお茶を飲む。

八月、利根川沿いに千葉、茨城を旅。その後、鶴沼で秋まで過ごす。途中、孤蝶と箱根、大磯に遊ぶ。

一葉死去の前後から、緑雨との交際が始まり、三十一年にかけての頃、互いに往来しては、それぞれの下宿を訪ねたり、向島雑司ヶ谷、目白方面などを歩き回る。秋骨が三十一年に山口に رفتた後も、互いに連絡を取り合う。

明治三十一年（一八九八）

二十八歳

一月一日、『文学界』がこの日を発行日とする第五十八号をもって廃刊。

この頃、藤村、孤蝶、緑雨と四人で浅草、千住方面を歩く。秋骨の本郷台町の下宿は「ザブタラネアン・ルーム」と呼ばれて、仲間の集まる所となっていた。禿木もしばらくこの下宿で暮らし、よく秋骨を訪ねて来ていた緑雨に会っている。土井晩翠が眉山や緑雨に初めて会うなど、ここを中心に文人達の交流が見られた。また緑雨は当時本郷の森川町の簾藤という下宿屋にいたが、そこには大野酒竹も下宿しており、秋骨、孤蝶はよくそこに集まっては雑談した。

二月四日、一葉の母、たき死去。元『文学界』同人も葬儀に参列。秋骨は香典に一円を贈る。

七月、東京帝国大学文科大学英文学科学選科を修了。修了証書は十月一日付、主要履修科目は、哲学概論、西洋哲学史、美学美

術史、史学、フランス語、ドイツ語、ローマンス語、チュートニツキ語、比較文法を学ぶ。英語（ラーガスタス・ウッド、ラフカディオ・ハーン）、心理学（元良勇次郎）、比較宗教及東洋哲学（井上哲次郎）、声光学（上田万年）、教育学（大瀬長太郎）、国文学（黒川真頼）。

夏、片瀬の農家で禿木と数日過ごす。次いで同家に来合わせた黒田清輝、和田英作ら、白馬会の画家たちと、ひと夏、交流する。

九月、山口高等学校へ英語講師として赴任。マコーレイの *Warren Hastings'* スウィントンの *Studies in English Literature'*

エマソンの *Twenty Essays* などを教える。同僚に戸沢正保（姑射）、佐々醒雪らがあり、姑射とは極めて親しかった。登張竹風が三十二年九月までドイツ文学教授。三十二年六月まで西田幾多郎も同僚であり、互いに往復した。山口に来てから、佐々らに誘われ喜多流の謡を始める。

九月二十三日、西田幾多郎と山を散歩。西田は明治三年生まれ。帝大哲学科選科を明治二十七年七月に卒業。ケーベル等に学び、秋骨とは同窓である。

明治三十二年（一八九九）

二十九歳

一月二十四日、西田幾多郎来訪。

同二十八日、山口高等学校の寄宿生茶話会に出席。

三月十四日、夜、西田幾多郎来訪、夜十時まで留まる。「光陰ヲ浪費シテ人ノ妨ヲナセリ。」と西田幾多郎が日記に記している。四月八日、午後、西田幾多郎来訪。

五月七日、午後西田幾多郎来訪、一緒に香山園に行く。

同二十四日、西田幾多郎を訪問。

六月二日、夕方、西田幾多郎来訪。一緒に「フットボール」に行く。

同五日、夜、西田幾多郎、佐々醒雪、他二名と蛍花を見る。

同六日、午後、西田幾多郎を訪問。

同十一日、西田幾多郎来訪。

同十三日、夕方、西田幾多郎来訪。一緒に「フットボール」に行く。

同十六日、西田幾多郎来訪。

同二十五日、午後、西田幾多郎来訪。

夏休みに山口から帰京。九月二日に藤村が築地の原家を訪ねるが、既に山口に帰った後で会えず。

九月、山口高等学校教授に就任(「山口高等学校一覽」明32・12・29に「教授 英語 一部二年監督 従七位 戸川明三 東京／士族」とある)。

十月八日、この頃の住所は山口県山口町上堅小路六十四宮原方後に山口町と湯田温泉との中間にあたる糸米に移ったと思われる。

明治三十三年(一九〇〇)

三十歳

二月、雑誌『太平洋』第八号の「文士内閣大見立」で貴族院議員の中に名前が挙がっている。

三月十七日、山口高等学校弓術部春季小会に出席。

五月二十一日、弓術部大会に参加。一つも当たらず。

八月、神田の学士会館での夏目漱石の渡英送別会に出席。漱石を紹介されたが、漱石は挨拶だけで何も言わなかった。この日漱石は会の調子を嫌って不快の様子だった。後に山口から東京に戻った折、漱石に就職の相談をしたところ親切に応じてくれたのがきっかけで、以後七、八年親しく往来することになる。

九月(三十四年八月、山口高等学校二年監督)。

十一月二十二日、山口高等学校の英独講談会で *Chinoy* の題で講演。

明治三十四年(一九〇一)

三十一歳

一月二十六日、山口高等学校の英独講談会に出席。

九月から三十六年八月まで高等学校二年三年監督及び図書主任。山口高等学校には、週間のロンドン・タイムズ、ロンドン絵入り新聞、コンテンポラリー、センチュリーなど外国の雑誌が届いていた。図書主任であった関係で外国の新刊本や雑誌、新聞を随意に購入できた。H. フィールディングの『トム・ジョーンズ』を読破し、十八世紀の英文及びその小説の起源に関する知識を得る上で大きな影響をうけた。

十二月、坪内逍遙『英文学史』の批評文、「坪内博士の英文学史を読む」を「蒼梧洞生」の署名で『帝国文学』に発表。逍遙はこの批評文を再版に転載して秋骨のもとに送る。

明治三十五年(一九〇二)

三十二歳

五月、雑誌『芸文』発刊について、根岸の料亭、岡野での会合に出席。他に禿木、上田敏等出席。後日観潮楼(鷗外居宅)に

集まり、各自書いたものを持ち寄って編集の相談をするが、こちらの方に秋骨が出席しているかどうかは不明。

夏、山口から上京。小田原にいた緑雨に誘われたが、出水のため汽車が不通になり会えなかった。

九月から翌年八月まで山口高等学校学友会役員のうち会報部監事となる。

十一月、一葉七回忌が築地本願寺で営まれ、禿木、孤蝶、藤村、小山内薫らと出席。法要の後、一同連れだつて銀座に出て、その頃唯一の喫茶店であつた鍋町の風月でゆっくり語り合う。

明治三十六年（一九〇三）

三十三歳

この頃、高等学校での授業のかたわら、文壇での執筆活動も盛んに行う。

一月四日、叔母の横井玉子、死去。

同二十九日、寄宿寮茶話会に出席。小説の話しをする。

三月、博文館・東京堂からR・L・スティヴンソンの *Will o' the Wisp* の訳註「世捨人」を上梓。

夏、山口より上京の折、与謝野鉄幹と知り合う（大正八、九年頃から親交深まる）。

十月二十一日、この頃の緑雨からの転居通知に「例ノ原稿モ左ノ処ヘアテ、御送被下度候」とある。緑雨は死（明治三十七年四月十三日）の前日、秋骨に原稿を返す旨を孤蝶に伝えているので、秋骨が緑雨に原稿を送っていたものと思われる。ただし秋骨自身は覚えがないと、のちに述べている（大正十三年八月三日付『朝日新聞』で孤蝶が述べているところによれば、緑雨

は原稿をどこかへ紹介することを秋骨から頼まれていたらしい）。

明治三十七年（一九〇四）

三十四歳

七月三十日、この頃上京。藤村と久しぶりに会って語る。十一月から三十九年三月五日まで『電報新聞』に翻訳「寒薺微」を連載。

この年、日露戦争の最中に、築地の原家の祖母、死去。

明治三十八年（一九〇五）

三十五歳

一月、日露戦争における旅順開城の日（一月二日）を記念して、髭をのばす。

四月、山口高等学校を廃し、高等商業学校に改称。これに伴い、山口高等学校教授を辞して帰京する。秋骨は学校側の措置に対して、戸沢姑射らとともに廃校後の保証を要求し、獲得した。この後、フランス、イタリヤ、ロシアの作品を英訳によつて翻訳するなど、数多くの翻訳を手がける。日露戦争の折り、従軍記者として出征するつもりで、星野天知のもとに別れの挨拶に行くが、その後この計画は中止になる。

秋以降に孤蝶から雑誌『芸苑』の同人に誘われるが断る。この年あたりから龍土会に出席するようになる。

明治三十九年（一九〇六）

三十六歳

二月、この時点の「東京府文書、規則書」に明治女学校の教職員として戸川明三の名がある。明治女学校は明治四十一年に廃

校になる。

七月十九日あるいは二十日、藤村に誘われ、村山鳥逕、小山内薫、武林無想庵らとともに隅田川中洲の真砂座で「破戒」「博多小女郎浪枕」を観る。

八月三十一日、上田敏を訪問。

九月二日、上田敏、禿木、藤村、孤蝶、秋骨の五人が集合。秋骨の欧米行きを歓迎。不忍弁天境内の笑福亭にて。古画商小林文七が錦絵などを欧米に売り込むため、通訳を探している旨、上田敏、孤蝶から紹介があり、承諾。

九月十日、モンゴリア号で横浜を出国。

同十六日、ミッドウェー島付近で船が座礁したため同島に上陸して数日を過ごす。

同二十二日、米国陸軍の救助船に乗船。

同二十八日、ホノルル着。

十月三日、アラメダ号にてホノルルを発し、サンフランシスコに向かう。

同九日、夜、サンフランシスコに到着。

同十一日、汽車でシカゴに向かう。

同十四日、シカゴ着。シカゴに滞在。

同二十日、ニューヨーク着。ニューヨークに滞在。

十一月三日、ニューヨークからボストンに向かう。

同四日、ボストン着。ボストン滞在。

同八日、カイゼリン・アウグステ・ヴィクトリア号でヨーロッパに向かう。

同十五日、プリマス着、ロンドンに滞在。

同二十三日、パリ着。

同二十四日、ルーブル美術館見学。

同二十六日、オペラ見物。

同三十日、汽車でベルリンに向かう。

十二月一日、早朝ベルリン着。

同三日、ライプチヒに行き、夜汽車でベルリンに戻る。

同七日、ハンブルク着。

同十三日、コックスヘヴンからアメリカに向かう。

同二十二日、ニューヨーク着。

同三十日、シカゴ着。

明治四十年（一九〇七）

三十七歳

一月一日、大北鉄道でシアトルに向かう。

同二日、セント・ポール着。

同五日、シアトル着。

同九日、ミネソタ号で帰国の途に就く。

同二十三日、横浜に到着。

三月九日、九段坂下ユニヴァースト教会における芸苑社主催の月次講演会で、上田敏、生田長江とともに講演。

四月、明治大学講師に就任。先行の年譜では、「明治学院講師」となっているが、『明星』明治四十年五月一日号に「明治大学講師となった」との記載があるので、ここではこちらを採用した。但し、後年、明治学院にも出講している。

五月、佐久良書房より翻訳・随筆集『西詞余情』を上梓。

五月五日頃、「並木」執筆中の藤村を新片町に訪ねる。孤蝶も一

緒。

同十二日、これより少し前に漱石を訪問しステイヴンソンの「プリンス・オットー」の批評家の名前を尋ねたのに対して、漱石は記憶がはっきりしなかったたので、この日の手紙で、たぶん英国のある雑誌かと思う、とした上、はっきり返事できなかったことを詫びている。漱石書簡の宛先は府下大久保仲百人町一五三番地。だが同地への転居の時期は未詳。

六月、藤村が孤蝶や秋骨をモデルにした小説「並木」を『文藝倶楽部』に発表したのに対し秋骨は自分の意見を発表する旨を表明している。

同月、閨秀文学会開講。これは成美女学校で教鞭をとっていた生田長江が中心になって作った、女性だけを対象にした文学研究会で、講師は秃木、孤蝶、与謝野晶子、相馬御風、森田草平等。秋骨は八月以降に講師として招かれた。教授科目は「欧州近代小説及戯曲」。ただしこの会は同年秋季には解散した。

七月十九日もしくは二十日、第一回の大久保会開催。これは独歩の発議で、大久保在住文士が独歩宅（西大久保一三三）に集まり雑談する会。二回開かれ、秋骨はそのいづれかに出席。二回目は八月か。独歩とは龍土会の席上、自然主義について論じた。

この頃、博文館からの一葉の日記公刊についての相談が始まる。藤村、秋骨らが校閲。この件について露伴とも関わる（明治四十一年三月十八日付の樋口邦子宛露伴書簡には「日記の公刊について」戸川氏はその後何等の御音信をも賜らず候、しかし、私はそれには構はず、森氏と一応相談の上」云々とある）。

九月、藤村の「並木」に対し、モデルとされた孤蝶は「島崎氏の『並木』（趣味）明治四十年九月」で激しく批判。秋骨も『中央公論』（明治四十年九月）に「並木」の登場人物と同じ原某の署名で小説「金魚」を発表した。

九月四日、八月六日発表の「郊外生活」についての漱石の書簡に対し、早速返事を出し、さらに漱石から、それに対する返礼を兼ねた手紙（九月四日付）をこの日以降に受け取る。この手紙には大久保の秋骨の住まいの近くに適當な貸家はないかとの問合わせがあり、早速手頃な貸家を二件紹介した。また同じこの手紙から、漱石が「金魚」を読んだことがわかる。

同十日頃、漱石は大谷正信から真宗大学の講師に適當な人を紹介してくれるように頼まれ、秋骨他二名を推薦する（九月十四日付の大谷宛漱石書簡によると、この推薦に対して大谷は、秋骨がクリスチャンであることを危惧しており、これに対し漱石は、信者だからというだけで採用しないというのは残念だ、と書いている。この頃秋骨は漱石を訪問、また直接大谷に真宗大学の件を問い合わせている）。

同月、真宗大学講師に就任。またこの頃までに、秋骨によって西大久保あたりは「文士村」と称されている。

十月十四日、この頃、漱石を介して「朝日新聞」に送った原稿がモデル問題などに関して改作をもとめられ、送り返される。十月、この頃、「六時會」というものの立ち上げに加わる。二十日六日付鈴木財藏宛若山牧水書簡に「今日、六時會に出席」とあり、また、この会は「大陸文学研究の目的で若い連中が集つて一つの会をつくり、孤蝶と秋骨の二氏を兄貴分にして毎土曜に

開いている。六時会という。」との説明がある。「趣味」明治四十一年四月の須藤南翠「新聞小説と予」には「孤蝶を中心として早稲田文科在学の諸氏によつて組織せられたる六時会は時々宇宙教会などにて講演会を開く」とある。

十一月二十五日、上田敏の欧米行き送別会に出席。上野精養軒にて開催。漱石が送別の辞。他に藤村、孤蝶、鷗外等出席。この会は青楊会と名付けられる。

十二月、『中央公論』に「モデル問題」(「モデル問題」の誤植)を掲載。

十二月二十日、神田和強楽堂での文芸講演会(会主は松本道別)で英文学を担当。この頃沼波瓊音と知己の間柄にあつた。この年あたりから内田魯庵との親交が深まっていく。

明治四十一年(一九〇八)

三十八歳

一月、東京高等師範学校講師に就任。また新詩社の小集に来賓として出席。

一月十八日、精養軒で開催された青楊会に出席。鷗外、和田英作ら出席者約二十名。

二月一日、漱石が朝日新聞社からの原稿料を持参して秋骨を訪ねるが、留守。また、漱石と、朝日新聞の「文芸欄」開設以前のこの頃、「文学欄」設置の希望を話し合っているらしい。

同二十四日、父、等照、死去。

二月頃、孤蝶の市ヶ谷の新居を訪ねる。内田魯庵が居合わせる。

三月、服部書店から『欧米ノ紀遊 二万三千哩』を上梓。

三月八日、九段坂下の成美女学校における講演会の第一回例会

で講演。またこの頃関秀文学家の集会である金葉会の例会が上野東華亭で開かれ、孤蝶、柳川春葉、与謝野晶子らとともに来賓として招かれる。

四月、秋骨の「郊外生活」を収めた、花袋・風葉編『二十八人集』が病床の独歩に送られる。

同月から十二月まで、『文章世界』に「英詩文評釈」を連載(六回)。

四月十六日、『二六新聞』が前日から「時代文芸欄」を設けたのを機に、上野精養軒に文士を招待したのでに応じて出席。

五月二十四日、独歩を茅ヶ崎の南湖院に見舞う。

六月六日、上野精養軒で催された二葉亭四迷の外遊送別会に出席。二葉亭とは最初にして最後の出会い。会には文士三十九名が出席した。

同七日、午後一時より、神田和強楽堂での第二十九回文芸講演会で「男子的性格」の題で講演。

同二十三日、国木田独歩死去。同二十九日、青山斎場での葬儀に参列。

七月十六日、この頃、金沢の四高教授であった西田幾多郎が翌年の東京転任を控え、西大久保在住の田部隆次(四高での同僚)に宛てた書簡で、秋骨の住まいが、田部の近くであるらしいことを伝えている。

十月二十五日、文芸講演会で「参考品」の題で講演。

十一月、東亜堂書房から『英文学講話』、日高有倫堂から評論集『時代私観』を上梓。

十一月二十三日、築地西本願寺での一葉追悼会に出席。

十二月、この頃、藤村、孤蝶と共に、かつて明治学院で同窓だった病友のために随筆集を出版しようという動きがある。

この頃高等師範学校の生徒が翻訳したツルゲーネフの『獵人日記』の校閲に従事。

明治四十二年（一九〇九）

三十九歳

一月、この頃、東京高等師範学校、早稲田大学、明治大学、真宗大学の講師を兼任している。なお明治四十三年九月からはじまる早稲田大学の新学年度の学科大要の中に「英文学（英文学科）——詩（ミルトル）『失楽園』 戸川明三」とあり、明治四十四年九月の大要の中には名が見えないことから考えて早稲田大学には明治四十四年七月まで在職していたものと思われる。二月二十日、帝大の第一回文芸談話会で「政治と文学」と題して講演。

この頃、明治大学校友会から雑誌『駿河台』が創刊、主な執筆者には秋骨のほか上田敏、佐々醒雪らがいた。

三月三十日、この日付の西田幾多郎からの田部隆次宛書簡で、「秋骨が近くに住んでいるのならば、久しぶりに逢ってみようか、」というように書いている。

四月八日、朝方、漱石を訪問。この日は木曜日（漱石面会日）。六月二十三日、独歩一周忌に出席。午後三時、赤坂の円通寺にて。

七月二日、午後、浅草区新片町に藤村を訪ねる。藤村と共に両国から深川行き河蒸気に乗って、新佃の海水館に禿木を訪ねたが留守。道々最近の文壇の話などをする。この頃『獵人日記』

の校閲をほとんど終わる。

七月から四十三年一月まで『学燈』にH・フィールディング原著の翻訳「トム・ジョーンズ」を連載（五回）。

同二十三日から二十九日まで『東京二六新聞』に「夏目漱石氏の文学論を読む」を連載（八回）。

同三十一日、早朝、漱石を訪問。

九月、昭文堂からツルゲーネフの翻訳『獵人日記』（共訳）を上梓。

九月五日、午後、西田幾多郎と田部隆次が来訪。山口以来、久しぶりの再会。幾多郎はこの秋より、学習院ドイツ語教師に就任。住まいは西大久保三八二番地。

同二十一日、西田幾多郎、来訪。

十月十日、暮れ方に西田幾多郎、来訪。

後藤宙外によれば、この年は、秋骨らの評論家も、文壇の一勢力を形勢している、という。

明治四十三年（一九一〇）

四十歳

一月、『新潮』一月号、「文芸百家年齢早見表」の四十一歳（数え年）の項目に小波、嶺雲、臨風と共に名前が挙がっている。

一月九日、西田幾多郎の来訪があるが、秋骨はこの時は留守。

二月、大日本文明協会からフレデリック・ローリエ原著の翻訳『比較文学史』を上梓。

三月二十三日、能会（霞宝会）あり。漱石も招待されるが、連絡が遅れ、不参。この日付の漱石よりのハガキによれば、この時の秋骨の住所は西大久保一五六番地。転居は四十二年以前か。

五月、喜多六平太の「道成寺」の演能を初めて鑑賞。

五月九日、丸善の新築披露会に出席。

同二十一日以前、この頃、玄黄社の社長、鶴田久作を禿木に紹介する。

同二十四日、夕方、散歩がてらに西田幾多郎が来訪。

七月十四日、午後四時からの神田学士会の送別会に出席。来会者は西田幾多郎をはじめ、帝大関係者。

同十六日、午後、西田幾多郎来訪。

同二十三日、漱石を長与胃腸病院に見舞う。

同二十九日、西田幾多郎来訪。西田は京都帝国大学文科助教授に転任が決まっており、八月三日、京都に向かう。

八月から大正二年五月まで『英語世界』に「英文学研究」を連載（三十一回）。

九月一日、同日付けで慶應義塾大学講師に就任。当時の慶應義塾幹事、石田新太郎の推薦による。文科で英文学、予科で英語（明治四十四、四十五年度は英文学も）を受け持つ。孤蝶とも同僚となる。水上瀧太郎、久保田万太郎らが聴講。明治四十三年は慶應義塾大学文科刷新の年で、文科には永井荷風、小山内薫、小宮豊隆らが教壇に立つ。

同五日、岩野泡鳴主筆「世界文芸社同人発表」に同人の一人として、秋骨の名が見える。

十一月七日、午後五時より、三田東洋軒で開かれた、朝鮮総督府に赴任する前慶應義塾幹事、石田新太郎の送別会を兼ねた三田文学会晩餐会に出席。荷風、小泉信三等出席。

十二月二十八日、長与胃腸病院に漱石を見舞う。

明治四十四年（一九一）

四十一歳

この年、由比友と結婚。

二月十七日、三田の構内倶楽部における、三田文学会座談会に出席。他に荷風、堀口大学、久保田万太郎、佐藤春夫、小山内薫、小泉信三、高橋誠一郎等出席。

二月、玄黄社から翻訳『エマーソン論文集』上巻を上梓。

三月四日、自宅で「うたひの会」を開く。島田賢平等、国民新聞社の同好の士が四く五人集まる。

五月十二日、同日付、漱石よりの在ロンドン大谷正彦宛の書簡で、漱石が秋骨の謠について触れている。

九月五日、この頃順天堂病院に入院するが病名は判明しなかった。漱石より見舞状あり。

十月上旬、この頃、順天堂病院を退院。

十一月十八日、午後一時より三田文学会秋期講演大会で講演。慶應義塾大学第三十三番教室にて、題目は「『文学界』時代の追懐」。閉会後構内の大和軒で講演者を主賓とした晩餐会。

十二月十日、長女エマ誕生。エマーソンにちなむ命名。

明治四十五年（大正元年）（一九一）

四十二歳

一月、玄黄社から翻訳『エマーソン論文集』下巻を上梓。

五月二十六日、この頃、夜の能会で漱石と会い画賛を依頼。漱石は一旦断つたのち、同月二十八日頃に自画自賛を送ってくる。画は最妙寺殿が後ろ向きになって歩いている、というもの。

七月、この頃興津に滞在。

八月六日、藤村、島崎広助(藤村次兄)、吉村樹、島崎松江らとともに藤村の亡夫人島崎冬子の三周年の墓参。帰りに駒形の前川というなぎ屋で昔語り。

四十五年度の講義内容は、『三田文学』に、「詩(古いもの)」とある。

大正二年(一九一三)

四十三歳

三月、大日本文明協会からH・マクファートソン原著の翻訳『近代思想界の変遷』を上梓。

三月十一日、本郷弓町の本郷教会で自由講座が開講され、講師の一人として名をつらねる(毎週、火、金の二日、午後五時から八時まで、自由な精神と自由な方法で新しい文芸を研究することを目的とし、哲学、文学、建築等、広い分野にわたって講義がなされたもの)。

同十三日、渡仏前の藤村を訪問。

同十五日、藤村、岡本敏行(明治学院の同窓生)らと藤村渡仏前の内輪の会食。

同二十一日、柳橋柳光亭で催された藤村の渡仏直前の小宴に出席。他に三宅克己、長谷川天溪、孤蝶、柳田国男らが出席した。

四月五日、東京市の依頼による東京市講演会で講演。題は「文芸の鑑賞」。神田一ツ橋帝國教育会にて開催。

同七日、この頃渡欧の計画あり。

四〇五月頃、随筆集『そのまゝの記』を校正中。

六月二十七日、飯田町四丁目三十一の喜多舞台で催された『ホトトギス』二百号記念文芸家招待能に出席。高濱虚子が主催。

出席者二百五十名。

七月、靱山書店から『そのまゝの記』を上梓。

九月、島村抱月が芸術座第一回公演(有楽座でメーテルリンク作『モンナ・ヴァンナ』「内部」を上演)に文士一同を招待。秋骨も観劇。

十月十二日、いところで俳人の大野洒竹、死去。悔やみに駆けつけた星野天知と玄関先で顔を合わせる。天知と会った最後。

十一月頃、府下大久保町大字西大久保六六に転居。

十一月、禿木の教え子、堀越喜博によって文芸誌『塔』が刊行され、蒲原有明らとともに助力。

大正三年(一九一四)

四十四歳

一月十四日、この頃漱石から『行人』を送られる。

同二十一日、築地精養軒での三田文学会新年懇話会に出席。鷗外、与謝野鉄幹、小山内薫、荷風、孤蝶らの他、慶應義塾文科卒業生、在学生らが多数出席。

一〇二月頃、二本榎の藤村の留守宅を訪れる。ここには当時、藤村の次兄が住んでいる。

四月二日、長男、有悟誕生。ヴィクトル・ユトゴーにちなむ命名。

八月、国民文庫刊行会からV・ユーゴー『レ・ミゼラブル』の翻訳『哀史』上巻を上梓。

十月二十九日、午後三時より、慶應義塾文科茶話会に出席。構

内、大楽軒にて。荷風、孤蝶、小山内薫ら三十余名出席。
十一月、『哀史』下巻を上梓。

大正四年（一九一五）

四十五歳

五月、東亜堂書房から『英文学精講』を上梓。

八月三十一日、藤村の友人、愛読者らによって「藤村会」が発足。花袋、孤蝶、小山内薫、有島生馬、中沢臨川とともに発起人の一人となる。一口、金五十銭以上の寄付を募集。

九月、国民文庫刊行会からD・S・メレジュコフスキーの原著の翻訳「先覚」を上梓。

十二月十一日、午後五時より、丸の内保険協会での三田評論年未会に出席。慶應義塾塾長はじめ関係者出席。

大正五年（一九一六）

四十六歳

一月末、「藤村会」（会員三百六十名）から六百フランがパリの藤村に送られた。次いで、二回目が二月十五日に送金される。

七月九日、上田敏、死去。

八月一日、次男正悟誕生。

八月、武蔵野に住む文士、画家の会「武蔵野会」が発足し、第一回が蒲原有明宅で行われた。秋の半ばには、同年七月に帰朝した藤村を迎え、秋骨が幹事となって、目黒の羅漢寺で会合が開かれた。

この年以降三〇四年間、明治学院に出講（『文鳥』昭和九年六月号に、「大正五年秋以降、三〇四年、明治学院に出講したが、不服があつてやめる」との回想記がある。先行の年譜では、大正九年から大正十五年まで再び明治学院に出講、となっている。大正九年五月二十七日頃、明治学院出講の噂を藤村が聞いてい

る）。

十月、戸山ヶ原の射的場の付近で漱石に会う。漱石に会ったのはこの時が最後になった。

十二月八日、午後五時より、三田東洋軒での、三田評論及三田演説会関係者の年末会に出席。

同九日、漱石死去。翌十日、漱石の弔問に行く。

大正六年（一九一七）

四十七歳

二月九日、第二回九日会（漱石生前の木曜会の変形で一月一回ずつ命日の九日に集まって会食、談話をする会）に出席。

五月、国民文庫刊行会から翻訳「エマソン全集」第四巻を上梓。

九月、阿蘭陀書房から翻訳「エマソン論文選集」を、国民文庫刊行会から翻訳「エマソン全集」第七巻を上梓。

同三十日、十二社での「武蔵野会」に参加。

十一月二十五日、佐々醒雪、死去。葬儀に列席。

十二月八日、午後五時から、三田東洋軒にて三田評論、三田演説会関係者の年末会に出席。

十二月、国民文庫刊行会から翻訳「エマソン全集」第六巻を上梓。

大正七年（一九一八）

四十八歳

四月、実業之日本社からT・カーライル原著の翻訳「オリヴァ・クロンウエル」（抄訳）を上梓。

四月からの文科の講義はチャールズ・ラムの『エッセイ・オブ・

エリア。

七月、禿木と共に駿河台鈴木町の邸にケーベル博士を訪ねる。

八月二十日、妹、乃ふ、死去。

十一月十二日、この頃荷風の居宅（来青閣）譲受の件につき吉

井俊三なる人物を荷風に紹介。

同二十三日、藤村、孤蝶らとともに築地本願寺での一葉の二十

三回忌に出席。

十二月七日、三男、民世誕生。

同十一日、三田評論、三田演説会関係者の年末会に出席。午後

六時より、三田東洋軒にて。

大正八年（一九一九）

四十九歳

三月二十五日、母、順死去。

四月からの文科の講義は、Borrow の *Lavengro* Emerson の

Essays

六月二十四日、夜、有楽橋畔のささやで開かれた三田文学茶話

会に出席。文科新任のカズンズ氏、野口米次郎等出席。

十月四日、夜、浅草田圃大金での『三田文選』出版記念会に出

席。河合貞一、石田新太郎、沢木四方吉、孤蝶等、二十数名出

席。

十月下旬より、文科にて、ディケンズの「二都物語」の講義開

始。

十二月十二日、三田評論執筆者、並びに三田演説会関係者の年

末晚餐会に出席。午後五時より、三田東洋軒。

この年からアルス文学叢書に禿木と共に深く関わる。また大正

八〇九年から与謝野鉄幹との親交深まる。

大正九年（一九二〇）

五十歳

四月から大正十四年まで、再び明治学院に出講。

五月九日、三男民世死去。同日、岩野泡鳴死去の報せが来る。

七月末から、一家で夏の間、葉山に避暑。

十二月十日、三田評論年末晚餐会に出席。午後五時より、三田

東洋軒。

この年以来、奥野信太郎ら教え子と、ほとんど毎週土曜日には、
決まって日吉の授業の帰りに会食をする。メンバーは一定して
いなかったが、五〇六人が集まり、文学やら食べ物のことなど、
いろいろ話す。

大正十年（一九二一）

五十一歳

三月二十五日、次女エミ誕生。

四月、今年度の講義内容は、マシュー・アーノルドの *Culture*

and Anarchy

四月十二日、文化学院創立。秋骨は与謝野夫妻と親しかったた

め、以後、顧問のような形で、文化学院に関わることになり、

大学部設置後は英文学を担当した。

七月末から、家族で、ひと夏を葉山で過ごす。

十二月十四日、三田評論年末晚餐会に出席。午後五時より、三

田東洋軒にて。

大正十一年（一九二二）

五十二歳

三月、東京府下西大久保二百六十五番地へ転居。ここは小泉八雲家の貸し家。もともとの一軒の家と庭とを、二つに分けた形になっていて、八雲の夫人（小泉セツ）がもう一方に住んでいた。

三月十五日、この頃藤村から雑誌『処女地』掲載のため、ミルの『婦人の服従』の翻訳を依頼される。

六月二十四日、鎌田前慶應義塾塾長の文相就任祝賀兼送別会に出席。午後五時より、芝公園内、三縁亭にて。

七月、アルスからE・A・ポーの翻訳『鋸山奇談』（アルス英文叢書第十一編）を上梓。

十月十三日、一葉記念碑除幕式出席のため甲府に行き、談露館に泊まる。

同十四日、午後、甲府の春日小学校で講演。この日も談露館に泊まる。

同十五日、甲州大藤村の一葉記念碑除幕式に樋口家から招かれる。当日、大藤小学校で追悼講演。渋谷三郎、半井桃水等も出席。孤蝶の尽力で関係者多数出席。

同十六日、朝、希望者六人で御嶽に行く。夜七時過ぎ、甲府に戻り、十一時過ぎの汽車で邦子等と共に帰京の途に着く。

十一月二十日、メエゾン鴻の巢における石井柏亭の欧州再遊送別の宴に出席。荷風に久し振りに会う。

大正十二年（一九二二）

五十三歳

一月、アルスからH・G・ウェルズ原著の翻訳『文化の聖書』

（相曾博と共に訳）を上梓。

二月二十六日、与謝野鉄幹の五十年誕辰祝賀晩餐会に出席。四月一日、雑誌『喜多』復刊第一号刊行。秋骨は編集客員として名を連ねている。編集主任は喜多六平太。

五月から昭和三年九月まで、秋骨の参加した能の合評会記録「品紫評紅録」が『喜多』に連載された（五十一回連載のうち三十一回に出席）。

八月、前年夏に引き続き、今夏も葉山下山口、沼田権蔵方に避暑。八月中滞在。

九月一日、関東大震災に遭遇するが、家人も家屋も無事だった。隣の小泉邸の孟宗藪に近隣の人々と一夜仮寝する。翌日あたり、当時柏木在任の内田魯庵が見舞いに来る。

震災前後、神経衰弱の保養のため、箱根に滞在。十一月一日、三女、エダ誕生。

大正十三年（一九二四）

五十四歳

一月、雪の日に、与謝野鉄幹、晶子夫妻と一緒に荻窪に土地を見に行き、七百坪の借地のうち、五百坪を与謝野家、二百坪を戸川家が借りて、隣どうしで家を建てて住むことにする。

六月、奎運社から『随筆 文鳥』を上梓。

六月四日、福沢諭吉夫人、錦子の葬儀に列席。

八月、例年と同じく、家族で葉山下山口、沼田権蔵方でひと夏を過ごす。

十月十六日、久しく途絶えていた三田文学茶話会に出席。水上滝太郎ら約四十名出席。新橋、千疋屋にて開催。

大正十四年（一九二五）

五十五歳

四月、文化学院に大学部が設置され、英文学を担当する。

五月十七日、文化学院生徒たちの写生旅行に同行して、日光を訪れ、中禅寺湖畔の米屋旅館に一泊。翌日帰京する。

七月、国民文庫刊行会からウォッツ・ダントンの翻訳『エイルキン物語』（世界名作大観第六巻）を上梓。

七月九日、鷗外、上田敏の共通の忌辰を記念する小集に出席。

六時よりメエゾン鴻之巢にて。上田夫人、森家の人達、芥川龍之介、堀口大学等出席。

同十八日、与謝野夫妻等文化学院教授と生徒の親、関戸信次を誘って伊豆へ旅行。熱海ホテルに一泊。

十月、アルスからJ・R・グリーン原著の翻訳『無敵艦隊』上梓。徳富蘇峰より喜多流謡曲の写本二百番全冊を譲られる。

十月十五日、この頃、白頭会（藤村と同時代の明治学院の同窓会）の幹事を藤村と共に引き受ける。同窓会の会場は星ヶ丘茶寮。

十二月二日から八日まで『報知新聞』に「凡人崇拜」を連載（六回）。

大正十五年（昭和元年）（一九二六）

五十六歳

一月一日から四月十五日まで『英語青年』に「リイ・ハントの註釈したキイツの『セント・アグネスの連夜』」を連載（六回）。

二月、アルスから『随筆集 凡人崇拜』を上梓。

三月十一日、この頃藤村に著書『凡人崇拜』を贈る。

三月から、禿木、竹友藻風らとともに東京放送局の英文学講座

の講師となる。

五月下旬、文化学院の修学旅行に加わって、与謝野夫妻、西村伊作らと熱海へ行き、熱海ホテルに二泊。

七月、大岡山書店から『英文学覚帳』第一書房から『小泉八雲全集』第七巻（共訳）を上梓。

七月四日、新居が完成し、荻窪に転居。与謝野鉄幹、晶子夫妻の隣家。住所は東京府豊多摩郡井荻町大字下荻窪三七一（東京市外下荻窪三七一、昭和六年四月に、表記は東京市杉並区荻窪二一一一九に変わる）。

昭和二年（一九二七）

五十七歳

三月十七日、この頃、藤村に『英文学覚帳』を贈る。

七月、新宮へ行き、文化学院校長の西村伊作の家を訪問。

八月、国民文庫刊行会からボツカチオ『デカメロン』の翻訳『十日物語』（世界名作大観第四十六巻）を上梓。

昭和三年（一九二八）

五十八歳

六月九日、星ヶ岡茶寮で催された孤蝶の六十歳の祝いの会に出席。藤村が発起人。他に田山花袋、小山内薫、水上瀧太郎、久保田万太郎、岡野知十親子、土岐善麿、生方敏郎、森田草平、森下雨村、田中貢太郎が出席。

同二十日、四男、潤誕生。

十一月二十四日、孤蝶の六十の賀を祝う三田文学系による記念講演会（聴衆二百人）が読売講堂で開催され、秋骨も講演者の一人として出席。講演者は他に土岐善麿、沖野岩三郎、森田草

平、小島政二郎、佐藤春夫ら。講演後、松本楼にて賀宴。

昭和四年（一九二九）

五十九歳

三月、禿木らとともに、日本シェイクスピア協会の顧問に推挙される。

四月、現代ユウモア全集刊行会から『楽天地獄』（ユウモア全集第三巻）を上梓。

八月、改造社の現代日本文学全集36『紀行随筆集』に「精進行」他四篇が収録される。

八月中旬から九月初旬にかけて、新居格、堀口九万一（堀口大文学の父）らとともに満蒙を旅行。八月十七日に大連着、以下、旅順、奉天、長春、ハルビンなどを巡り九月六日帰途につく。ハルビンでは当時京城帝国大学教授であった安部能成に会った。

昭和五年（一九三〇）

六十歳

一月六日、丸善に行く。

五月三十一日、日比谷山水楼で慶應英文科出身者有志により秋骨の還暦を祝う会が開かれた（『三田文学』二月号に、今年は還暦にあたり、卒業生有志主催で五月中旬祝賀会を開く予定、の記事が見える）。

七月、改造社からH・ケーン原著の翻訳『永遠の都』（世界大衆文学全集第三十九巻）を上梓。

九月十一日、五男、明誕生。

昭和六年（一九三一）

六十一歳

一月、大岡山書店から『能楽礼讃』を上梓。

五月、第一書房から『自然・気まぐれ紀行』を上梓。

十二月、慶應義塾大学文学部の会議の席で罷免を通告される。翌年からは予科の英語及び英文学、昭和十年度より経済学部講師として英文学を講義。

昭和七年（一九三二）

六十二歳

一月半ば、藤村を訪問。三宅克己の噂などする。

夏、禿木が三十年振りに天知に再会。秋骨の謡いの噂などを、天知は知人の虚子から聞いている。「一度聞きたいものだ」と天知。

九月半ば、天知から禿木に来信。秋骨、藤村などと集まり、一度翁会をしたいものだ、というような内容。

十月から八年七月まで『英語青年』に「ホワイトのセルボオンの博物志」を連載（十六回）。

十月前後、明治文学談話会で講話。

昭和八年（一九三三）

六十三歳

一月二十八日、大森サワダヤにて奥野信太郎ら学生による第一回秋骨会が開かれる。ただしこの時は欠席。

二月、春秋社から翻訳『マコーレー論文集』（世界大思想全集第七十二巻）を上梓。

二月十八日、第二回秋骨会に出席。午後五時より、浜町の松葉にて。

三月二十四日、浜町の松楽での第三回秋骨会に出席。娘のエマも出席。

五月二十日、飯倉の三縁亭での秋骨会に出席。席上、雑誌『文鳥』発刊の議がおこる。

六月、岩波書店から『伝記文学』（岩波講座 世界文学）を上梓。七月十四日、秋骨会。柳橋の双葉にて。

八月、沼津牛臥の海岸で数日を過ごす。

九月十七日、本郷区追分の帝大基督教青年会における明治文学談話会例会で『『文学界』の回想』と題して講演。

十月、秋骨会から同人雑誌『文鳥』が創刊された。

十一月三日、松楽での「文鳥の会」に出席。孤蝶も同席。

十二月、第一書房から『随筆集 都会情景』を上梓。

昭和九年（一九三四）

六十四歳

三月十一日、「日本野鳥の会」発足。中西梧堂、柳田国男、禿木等と共に設立発起人の一人として名前を連ねる。

同十七日、薬研堀、松楽での第七回秋骨会に出席。

五月、「日本野鳥の会」より、雑誌『野鳥』創刊。

六月二日～三日、「日本野鳥の会」主催による「富士山麓探鳥会」に参加。参加者は他に柳田国男、窪田空穂、北原白秋、中村星湖、金田一京助・春彦ら。同じ頃、茅野蕭々に率いられた慶應

独文科の学生たちと共に赤城の黒檜山に登る。

七月九日、東京駅階上の鉄道ホテルで開かれた「九日会」に出席。この会は森鷗外、上田敏を記念して毎年行われていた。

同二十日、薬研堀、松楽での第八回秋骨会に出席。

八月、公爵・大山柏（大山巖の次男、考古学者）に伴われ、沼津牛臥の海上で釣を試みる。この近くに公爵家の別荘がある。

十月二十七日、第九回秋骨会。

十一月二日、「日本野鳥の会」主催「百草園霞網獵見学の会」に参加し、百草園での座談会「鳥に就いて物を聴く会」に出席。

同月、研究社から『バトラー』（研究社英米文学評伝叢書五十九）を上梓。

昭和十年（一九三五）

六十五歳

一月四日、与謝野鉄幹夫妻の招きで鎌倉に行く。有島生馬が案内。

同三十日、ラジオで「ユウトピア物語」について放送。

三月十八日、薬研堀松楽にて秋骨会。

同二十六日、与謝野鉄幹死去、同二十八日の告別式に悼辞を読む。

四月下旬、同行六人で四万温泉に一泊。さらに新鹿沢に一泊して翌日小海線、中央線経由で帰京。

十月五日、歌舞伎座で開催された中央公論社創立五十周年記念祝賀会に招かれて出席。

十月、第一書房から『随筆集 自画像』を、研究社から『ウオルトン』（研究社英米文学評伝叢書十）を上梓。

昭和十一年（一九三六）

六十六歳

四月、本郷東片町の大円寺で緑雨の三十三回忌法要が営まれ、孤蝶、笹川臨風、藤村らと共に出席。

六月、山本書店から翻訳集『小鳥の英文学』を上梓。
八月、山本書店からE・A・ポールの翻訳『鋸山奇談』（大正十一年刊のアルス版とは別版）を上梓。

九月二日、美術院の展覧会で、岡倉由三郎に会う。高等師範学校での同僚。

昭和十二年（一九三七）

六十七歳

一月、謡曲界発行所から『能楽鑑賞』を上梓。

十二月、第一書房から『随筆集 朝食前のレセプション』を上梓。

昭和十三年（一九三八）

六十八歳

秋、夜行で松本から上高地に行き、そのまま車で飛騨高山に向かい一泊、翌日帰京。

九月、東京会館で開かれた「北村透谷会」に出席。萩原朔太郎、佐藤春夫、与謝野晶子ら出席。

十月十七日、東京帝国大学で開かれた日本英文学会第十回大会でサミュエル・ジョンソンに関する特別講演。

同二十四日、亀島町の偕楽園で行われた、東宝映画「樋口一葉」（監督並木鏡太郎、一葉役は山田五十鈴）についての座談会に、孤蝶、久保田万太郎らとともに参加。

十一月、岩波書店から翻訳『エマソン論文集I』を上梓。

昭和十四年（一九三九）

六十九歳

春、明治座で「一葉舟」観劇。花柳草太郎が一葉を演じた。

三月末、喜多の能会へ行き、久保田万太郎から沢村田之助を紹介される。

同月、岩波書店から翻訳『エマソン論文集II』を上梓。

四月二十四日、佐藤春夫の甥竹田龍児と谷崎潤一郎の長女鮎子の結婚披露宴（泉鏡花夫妻媒酌）に出席。宴の後、次の部屋の丸いテーブルで鏡花と秋骨の二人が話し込んでいたところを、列席者の一人、志賀直哉が見かける。志賀直哉はこの時、志賀に気づいた鏡花に呼ばれ、秋骨とも挨拶を交わす。

五月、この月以来病臥。奥野信太郎らが見舞いに訪れる。この頃樋口一葉の映画が上映され、病床に映画のスクリーンが届けられる。

六月、岩波書店から『エマソン論文集III』を上梓。

七月五日、神経痛のため慶應病院に入院。同月八日、長女エマに「どうも病院へ来たのは失敗だった。何もかも悪くなった」ともらしている。

七月九日、急性腎臓炎を併発し、午後六時三十分死去。慶應義塾在職中（『三田評論』昭和十五年八月号による）。同月十一日午後二時より、青山斎場で葬儀がとり行われた。戒名は「自然院釈英明秋骨居士」。

付記

本稿作成にあたっては戸川家のご遺族から貴重な資料をご提供頂きました。また左の諸機関に資料の調査・閲覧に関して格

別の便宜をはかっていただきました。ここに記して改めて謝意を表したいと思います。

早稲田大学図書館特別資料室 山口大学図書館
 慶應義塾三田情報センター 慶應義塾福澤研究センター
 玉名市役所〔順不同〕

主要参照文献一覧

排列は、各分類内での刊行順に従った。ただし、一連の書籍や全集、叢書の類は一括し、そのうち最も早い刊行時の位置に掲げた。

馬場孤蝶自筆日記

早稲田大学図書館蔵

〔行為思想断片日録〕(明治二十四年～二十五年)

〔思ひ出の俣〕(明治二十六年)

〔そゞろ言〕(明治二十六年～二十七年)

〔空夢日録〕(明治二十八年～二十九年)

単行本・全集・叢書

〔そのまゝの記〕 戸川秋骨 稗山書店 大正2年7月
 〔たけくらべ〕(真筆版) 樋口一葉 博文館 大正7年11月
 (名著復刻全集 日本近代文学館 昭和47年9月)
 〔泡鳴全集 第十一巻〕 岩野泡鳴 広文庫 大正10年6月
 〔孤蝶随筆〕 馬場孤蝶 新社 大正13年10月
 〔思ひ出す人々〕 内田魯庵 春秋社 大正14年6月

〔自己中心明治文壇史〕 江見水薩 博文館 昭和2年10月
 (復刻版 日本図書センター) 昭和57年11月

〔自然・気まぐれ紀行〕 戸川秋骨 第一書房 昭和6年5月
 〔明治文壇回顧〕 馬場孤蝶 協和書院 昭和11年7月

〔黙歩七十年〕 星野天知 聖文閣 昭和13年10月
 (明治大正文学回想集成9 日本図書センター)

〔飛騨抄〕 蒲原有明 書物展望社 昭和13年12月

〔文学界〕記伝 増田五良 聖文閣 昭和14年12月

〔雙龍硯〕 平田禿木 七文書院 昭和16年11月
 (復刻版 国書刊行会) 昭和49年4月

〔樋口一葉全集 4巻〕 森潤三郎 新世社 昭和16年12月

〔鷗外森林太郎〕 森潤三郎 森北書店 昭和17年4月

〔一葉に与へた手紙〕 樋口悦編 今日の問題社 昭和18年1月

〔禿木遺響 文学界前後〕 平田禿木 四方木書店 昭和18年9月
 (明治大正文学回想集成14 日本図書センター)

〔明治文壇の人々〕 馬場孤蝶 東西出版社 昭和23年6月

〔パンの会(近代文芸青春史研究)〕 野田宇太郎 六興出版社 昭和24年7月

〔透谷全集 第二巻〕 中島久万吉 岩波書店 昭和25年7月
 〔政財界50年〕 大日本雄弁会講談社 昭和26年4月

〔川台山月と明治の文学者たち〕 川台道雄 基督教団事務局出版部 昭和29年5月

〔透谷全集 第三巻〕 岩波書店 昭和30年9月

〔一葉の日記〕	和田芳恵	筑摩書房	昭和32年4月	〔明治文学全集 51 与謝野鉄幹 与謝野晶子集〕	筑摩書房	昭和43年5月
〔「文学界」とその時代〕上	笹淵友一	明治書院	昭和34年1月	〔明治文学全集 20 川上眉山 巖谷小波集〕	筑摩書房	昭和43年7月
〔若山牧水全集 第11巻〕	雄鶏社	昭和34年2月	〔明治文学全集 73 永井荷風集〕	筑摩書房	昭和44年12月	
〔近代文学研究叢書 第14巻〕	昭和女子大学近代文学研究室	昭和34年11月	〔明治文学全集 40 高山樗牛 齋藤野の人 姉崎嘲風 登張竹風集〕	筑摩書房	昭和45年7月	
〔近代文学研究叢書 第44巻〕	昭和女子大学近代文学研究室	昭和34年11月	〔明治文学全集 48 小泉八雲集〕	筑摩書房	昭和45年7月	
	昭和女子大学近代文化研究所	昭和52年1月	〔明治文学全集 17 二葉亭四迷 嵯峨の屋おむる集〕	筑摩書房	昭和46年11月	
〔慶應義塾百年史 中巻(前)〕	慶應義塾	慶應通信	昭和35年12月	〔明治文学全集 32 女学雑誌・文学界集〕	筑摩書房	昭和48年9月
〔慶應義塾百年史 中巻(後)〕	慶應義塾	慶應通信	昭和39年10月	〔明治文学全集 34 徳富蘇峰集〕	筑摩書房	昭和49年4月
〔荷風全集 第十九巻〕	永井荘吉	岩波書店	昭和39年5月	〔明治文学全集 29 北村透谷集〕	筑摩書房	昭和51年10月
〔明治初期の文学思想〕上(明治文学研究第四巻)	柳田泉	春秋社	昭和40年3月	〔明治文学全集 24 内田魯庵集〕	筑摩書房	昭和53年3月
〔明治初期の文学思想〕下(明治文学研究第六巻)	柳田泉	春秋社	昭和40年7月	〔明治文学全集 98 明治文学回顧録集(一)〕	筑摩書房	昭和55年3月
〔明治文学全集 71 岩野泡鳴集〕	筑摩書房	昭和40年3月	〔日本現代文学全集 9 北村透谷集 附文学界派〕	筑摩書房	昭和55年8月	
〔明治文学全集 31 上田敏集〕	筑摩書房	昭和41年4月	〔中央公論社の八十年〕	講談社	昭和40年4月	
〔明治文学全集 28 齋藤緑雨集〕	筑摩書房	昭和42年2月	〔西田幾多郎全集 第十七巻〕	岩波書店	昭和41年5月	
〔明治文学全集 58 土井晩翠 薄田泣菫 蒲原有明集〕	筑摩書房	昭和42年4月	〔西田幾多郎全集 第十八巻〕	岩波書店	昭和41年6月	
			〔西田幾多郎全集 第十九巻〕	岩波書店	昭和41年9月	

- 〔漱石全集〕第十三巻 岩波書店 昭和41年11月
- 〔漱石全集〕第十四巻 岩波書店 昭和41年12月
- 〔漱石全集〕第十五巻 岩波書店 昭和42年2月
- 〔漱石の思い出〕 夏目鏡子(松岡譲 筆録) 角川文庫 昭和41年3月
- 〔定本 国木田独歩全集 第十巻〕 国木田独歩全集編纂委員会編 学習研究社 昭和42年9月
- 〔藤村全集 第三巻〕 筑摩書房 昭和42年3月
- 〔藤村全集 第十七巻〕 筑摩書房 昭和43年11月
- 〔明治女学校の研究〕青山なを著作集第二巻 慶應通信 昭和45年1月
- 〔春〕 青山なを 慶應通信 昭和45年1月
- 〔志賀直哉全集 第七巻〕(泉鏡花の憶ひ出) 岩波文庫 昭和45年3月
- 〔漱石文学全集 別巻〕 荒正人 集英社 昭和49年10月
- 〔三田文学総目次〕 慶應義塾三田文学ライブラリー 講談社 昭和49年10月
- 〔樋口一葉全集 第三巻 上〕 筑摩書房 昭和51年7月
- 〔こしかたの記〕 樋口一葉全集 第三巻 上 筑摩書房 昭和51年12月
- 〔明治学院百年史〕 学校法人明治学院 昭和52年1月
- 〔日本近代文学大事典 第五巻〕 学校法人明治学院 昭和52年11月
- 日本近代文学館 講談社 昭和52年11月
- 〔定本 上田敏全集第六巻〕 教育出版センター 昭和52年11月
- 〔定本 上田敏全集第十巻〕 教育出版センター 昭和55年5月
- 〔平田秃木選集 第三巻〕 南雲堂 昭和56年10月
- 〔東京の三十年〕 田山花袋 岩波文庫 昭和56年3月
- 〔島崎藤村全集〕10巻 筑摩書房 昭和56年5月
- 〔島崎藤村全集〕11巻 筑摩書房 昭和56年11月
- 〔島崎藤村全集〕別巻 筑摩書房 昭和57年1月
- 〔新潮日本文学アルバム 別巻 島崎藤村〕 新潮社 昭和58年1月
- 〔新潮日本文学アルバム 島崎藤村〕 新潮社 昭和58年8月
- 〔明治女学校の世界〕 藤田美実 青英舎 昭和59年10月
- 〔馬場孤蝶〕 木戸昭平 高知市民図書館 昭和59年10月
- 〔新潮日本文学アルバム 樋口一葉〕 新潮社 昭和60年3月
- 〔新潮日本文学アルバム 別巻 明治文学アルバム〕 新潮社 昭和60年5月
- 〔新潮日本文学アルバム 別巻 大正文学アルバム〕 新潮社 昭和61年10月
- 〔一期一会抄〕 戸川エマ 講談社 昭和61年11月
- 〔平田秃木選集 第五巻〕 南雲堂 昭和61年5月
- 〔万象録〕高橋箒庵日記 巻一 思文閣出版 昭和61年10月
- 〔万象録〕高橋箒庵日記 巻二 思文閣出版 昭和61年12月
- 〔万象録〕高橋箒庵日記 巻三 思文閣出版 昭和61年12月
- 〔斎藤緑雨全集〕巻八 筑摩書房 昭和61年12月
- 〔馬場孤蝶 帰郷日記〕 岡林清水編 孤蝶の碑を建てる会 平成2年12月
- 〔内田魯庵傳〕 野村喬 リプロ 平成2年12月
- 〔樋口一葉事典〕 岩見照代他編 おうふう 平成6年5月
- 〔定本 上田敏全集第六巻〕 教育出版センター 平成8年11月

〔樋口一葉來簡集〕 野口碩編 筑摩書房 平成10年10月

〔文学者の日記 3 星野天知〕（日本近代文学館資料叢書） 博文館新社 平成11年7月

〔漂標の旅人〕 古屋行夫 本の泉社 平成13年5月

〔築地外人居留地〕 川崎晴朗 雄松堂出版 平成14年10月

〔明治大正東京散歩〕（古地図ライブラリー別冊） 人文社 平成15年10月

〔戸川秋骨 人物肖像集〕 坪内祐三編 みすず書房 平成16年3月

雑誌・新聞

〔評論〕 明治26年7月

〔文学界〕 明治27年4月（16号）、同27年5月（17号）

同27年6月（18号）、29年8月（44号）

〔女学雑誌〕 明治27年6月9日、同12月25日、明治28年2月25日

〔帝国文学〕 明治28年11月、同30年3月、同38年1月

〔読売新聞〕 明治30年1月19日（川上眉山「ふところ日記」）

〔文芸倶楽部〕 明治30年4月

〔新著月刊〕 明治30年4月

〔山口高等学校一覽〕 明治32年度、同33年度、同34年度、同35年度

〔山口高等学校校友会 学友会報〕 明治32年7月17日号、同33年6月30日号、同33年12月27日号、同34年3月25日号、同36年3月10日号

〔明星〕 明治35年6月、同36年4月、同36年8月、同36年10月、同38年12月、同39年10月、同40年2月、同40年3月、同40年5月、同40年8月、同41年2月、同41年3月、大正12年4月

〔小天地〕 明治36年1月

〔新潮〕 明治38年5月15日、同41年7月15日、同43年1月1日

〔文章世界〕 明治39年8月1日、同40年6月1日、同40年9月1日、同41年4月1日、同41年6月1日、同41年11月15日、同42年2月1日、同42年12月15日、同43年10月15日、同45年3月1日、大正元年10月15日、同4年4月1日、同7年12月1日

〔新小説〕 明治40年3月、同42年1月、同42年3月、同43年2月、同43年4月、同44年3月、同45年2月、同45年8月、大正元年9月、同2年12月、同11年8月、同15年1月

〔趣味〕 明治40年6月1日、同40年11月、同40年12月1日、同41年1月1日、同41年2月1日、同41年3月1日、同41年4月1日、同41年7月1日、同41年11月1日、同41年12月1日、同42年1月1日、同42年5月15日、同42年7月1日

〔早稲田文学〕 明治40年9月、同41年1月、同41年3月、同41年5月、同41年7月、同41年12月、同42年8月、同43年9月、同44年12月、大正2年4月、同15年4月

〔国民新聞〕 明治41年11月12日、同44年9月6日

〔中学世界〕 明治42年1月

〔英語世界〕 明治42年1月、同44年10月、同44年11月

〔読売新聞〕 明治42年5月1日、大正4年8月31日、同7年8月10日、同7年9月6日、7日

〔現代〕 明治42年8月5日、昭和5年8月

〔三田文学〕 明治43年10月、同44年12月、同45年1月、大正2年1月、同2年4月、同2年6月、同2年9月、同3年3月、同3年

9月、同3年秋期特別号、同7年6月、同11年4月、同11年8月、同12年8月、昭和10年6月
 明治43年〜大正3年
 大正7年1月、7月、同8年1月、7月、同9年1月、7月、同10年1月、7月、同11年1月、4月、7月、8月、同12年8月、同13年7月、8月、12月、同14年8月、同15年8月、12月、昭和2年〜15年各8月
 大正2年3月
 大正3年2月
 大正8年7月、
 大正10年1月
 大正13年8月3日、昭和14年7月11日
 大正14年3月、同14年6月、昭和11年7月、同12年3月、同13年3月
 大正15年12月
 昭和5年5月
 昭和6年1月
 昭和8年10月、同9年2月、6月、11月、同10年4月、同11年2月
 昭和9年1月、4月、6月
 昭和9年5月、同10年1月、同14年9月
 昭和9年7月28日
 昭和10年3月
 昭和10年4月
 昭和10年4月
 昭和10年4月
 慶應義塾学報
 三田評論
 青鞥
 塔
 開拓者
 新文学
 朝日新聞
 文芸春秋
 改造
 ゆうもあ
 喜多
 文鳥
 明治文学研究
 野鳥
 冬柏
 随筆趣味
 文芸
 セルバン

行動
 昭和10年5月
 作品
 昭和12年1月
 日本詩壇
 昭和14年3月
 三田新聞
 昭和14年8月10日
 書物展望
 昭和14年9月
 英語青年
 昭和14年9月1日、同14年9月15日
 謡曲界
 昭和14年7月、9月
 東京日日新聞
 昭和15年8月14日
 自由婦人
 昭和23年9月（一葉・われは女なりけるものを）
 明治大正文学研究
 昭和24年6月（資料 孤蝶日記）
 昭和29年7月（本間久雄「冬扇録」）
 国文学 解釈と鑑賞 別冊 現代文学講座 明治の文学I
 昭和50年2月
 名古屋大学国語国文学
 昭和53年12月（高橋昌子「春」の書と戸川秋骨）
 昭和57年1月
 文学
 （紅野敏郎）『馬場孤蝶日記』（新資料）の意義
 昭和59年4月
 国文学
 （紅野敏郎）『馬場孤蝶日記』（一九二八年）
 SPANZO（オリベッティ社）昭和59年9月20日
 明治学院史資料集 第十三集 清水徹編集代表 明治学院大学図書館
 昭和61年11月
 明治学院史資料集 第十四集 清水徹編集代表 明治学院大学図書館
 昭和62年11月
 研究実践紀要
 平成5年7月

（岩居保久志「馬場孤蝶論―その日記および随筆の―考察―」）

〔熊本日々新聞〕 平成15年6月29日朝刊（「近代肥後異風者伝」27）

〔近代文化の原点―築地居留地〕 3 築地居留地研究会

平成16年11月20日